月刊 FALCOM MAGAZINE

Vol.32

日本ゲーム大賞 Japan Game Awards 2013 フューチャー部門 受賞



ティラスイールの各地を巡礼した結果!?
みんな集まれ！ファルコム学園
新久保だいすけ

読み切り漫画
イース人気キャラ大集合！
やっぱりふるさとが一番!?
地元に帰ろう
ふしみゆうり

コミカライズ
『空の軌跡 FC』
最終巻も発売直前！
啄木鳥しんき イラスト メッセージ

ティオのファルコムラジオ めんどくさいです…でもがんばりますの舞台裏

ファルコムjdkバンド ドラマー・オカジの
人生半キャラずらし

jdkバンド ボーカル・コテカナの
コテ放題♥

つい発売！ 閃の軌跡の秘密に迫る！

日本ファルコム株式会社 代表取締役社長

近藤季洋氏インタビュー

まだまだ続く『閃』特集！

学院の気になる生徒たちをチェック！
英雄伝説 閃の軌跡 潜入レポート

帝国といえばこの人！ オリビエの「軌跡」を振り返る！
ドラマCD 『英雄伝説 空の軌跡 オリビエ物語 ～未完成の叙事詩～』 シナリオ一挙掲載！






FALCOM MAGAZINE

CONTENTS

THE LEGEND OF HEROES 閃の軌跡 センノキセキ

リベール通信緊急号外 潜入レポート

リベール通信
帝国支部
アッシュ洋平
リベール通信帝国支部の新米記者。先輩であるナイアル・バーンズにあこがれ、日々スクープを追う。

いよいよ発売となった『閃の軌跡』！ 今回は、日本ファルコムの社長・近藤季洋氏にゲームの魅力や開発秘話を語っていただいた。

日本ファルコム代表取締役社長 近藤季洋氏に直撃！



PROFILE
近藤季洋氏
日本ファルコムの代表取締役社長。『軌跡』シリーズには第１作目の『空の軌跡FC』から制作に携わっている。

――9月26日に『英雄伝説 閃の軌跡』がついに発売されました。ご感想をおきかせいただけますか？

近藤季洋氏（以降 近藤 敬称略）：「軌跡」シリーズは回を重ねるごとに進化をさせてきたのですが、今回の『閃の軌跡』は特に、進化の度合いが一番大きいと思っています。今までのクォータービューから変更されていたり、戦闘システムもそうですね。もちろん、舞台がエレボニア帝国に移ったこともあります。スタッフも、これまで断片的にしか描かれていなかった帝国を描けるということで、気合を入れて制作をしていました。

――PCからPSP、そしてPS3とPS Vitaの両機種での発売とプラットフォームが変わってきての最新作となるわけですが、たとえば、3Dで『軌跡』の世界を再現しているなど、本作でとくに注目してほしいポイントはどこでしょうか？

近藤：やはり３Dになったことで、フィールドであるとか街であるとか、今までとは違う雰囲気で、臨場感のあるものになっているかと思います。そこに、アクティブボイスというものもありますので、よりその土地を訪れているという雰囲気を、今まで以上にリアルに感じていただけるのではと思っています。

――遊撃士、クロスベル警察、そして士官学院の生徒と、主人公たちの立ち位置が毎シリーズごとに変わっていますが、今回、士官学院の生徒を主人公に選ばれたのはなぜでしょうか？

近藤：作品全体を通じてのシナリオのテーマがあるのですが、「絆」なんですね。帝国の中にも様々な立場の人がいて、時には衝突をしつつも、互いにそれを乗り越え、みんなで何かを成し遂げて行く。これを帝国だからこそ描きたかったんです。帝国を描くにあたって、当初は遊撃士、警察と来たから次は軍人、と考えていたんですよ。帝国は軍国主義の国でもありますので。しかし実際に軍人で考えてみようと思って進めてみると、かなり制約が多くてやりづらいぞと（笑）。そうしていくうちに、軍籍ではあるものの、ある程度ＲＰＧらしい行動ができ、自身の成長を描くことができる立場はなんだろうと考えた結果、士官学院の生徒となったわけです。



■ **英雄伝説 閃の軌跡**

メーカー	日本ファルコム
機種	PlayStation 3 PlayStation Vita
発売日	9月26日
価格	【PS ３】通常版8,190円（税込）、 限定ドラマCD同梱版9,240円（税込）、 DL版6,800円(税込) 【Vita】通常版7,140円（税込）、 限定ドラマCD同梱版8,190円（税込）、 DL版6,200円(税込)

帝国を描けるということで、気合を入れて制作をしていました。

――『空の軌跡』のエステルや『零の軌跡』のロイドと同じ年齢ではなく、今回はひとつ下というのも意外でした。

近藤：士官学院とはいえ学生ですから、厳しい状況下にあったとしても、年齢相応の日常があると思うんですよ。そういったちょっと青春っぽい青臭いものも入れたいということを考えると、社会人として活躍しているエステルたちよりも下でもいいのではないかと考えました。

――オープニングは、クロスベル通商会議の裏で起こったガレリア要塞でのイベントからはじまりますが、こちらを採用された理由は？ またこの事件が起きるのはゲームの中でどれぐらいの位置でしょうか。

近藤：冒頭に、これからこういうことが起きるよという盛り上がりを見せたかったんですね。候補はいくつかあった中からこれを選んだ理由は、元々『空』を終えたらすぐに帝国編を作る予定だったんですね。でも間にクロスベルを描く『零』と『碧』を挟んだんです。ではなぜ挟んだかというと、『空』が終わった段階で帝国という国がどのようなものかというものはある程度分かったのですが、クロスベルを描くことで、さらに帝国の強大さ、壮大さ、恐ろしさのようなものを見せることができるだろうと。その上で帝国を描くことによって、より帝国にふさわしいスケール感を出せると思いました。そう考えて行くと、冒頭はやはり『碧』でも登場したガレリア要塞だなということになりました。この事件がゲーム中で起きるのは、中盤から終盤にかけての話ですね。序盤はⅦ組というメンバーが集って、帝国で起こっている問題に主人公たちが相対しつつも、学生らしい青春的な話題もあって、というものなのですが、中盤以降はどんどんとシリアスな展開も出てきます。このガレリア要塞での事件もそのひとつです。

――また、『the 3rd』の段階で次はクロスベル編か帝国編かどちらかで悩んでいたと過去のインタビューでおっしゃっていましたが、両者のリンク的なところは、当初から構想されていたのでしょうか？

近藤：クロスベルを描くということで新たに詳細を設定し直したりということはありましたが、大きな枠組みは当時のままですね。

――本作のストーリーのテーマを教えていただけますか？

近藤：みんなの力で何かをやり遂げ

るということですかね。シナリオを作るにあたって、こういうことは描く、というものは明確にしますが、実はテーマという形で何かを用意することはしてないんですね。前シリーズで言うと「壁を乗り越える」というものを明確にして描いていきました。今回は学院が舞台ということで、いろいろな立場の人間が一同に集います。そんな主義・主張の違うメンバーが一緒に何かを成し遂げるということが大きなテーマになっているかと思います。

――今回の主人公であるリィンたちⅦ組のメンバーは総勢9名と多いですが、ここも当初の想定通りとなっているのでしょうか。

近藤：そうですね。Ⅶ組のメンバーというのは言うなればエレボニア帝国の縮図なんです。四大名門というバリバリの貴族であるユーシス。平民の軍人という家柄のエリオット。かたや帝国の本体とは距離を置いている遊牧民族出身のガイウス。そして、貴族なのか平民なのか、中間のような位置にいるリィンであるとかですね。あれだけの人間が集まれば、自分自身が理解できない相手がいたりとか戸惑いがあったりとかするじゃないですか。そこでぶつかりあったりするわけですが、そんな中で友情関係、協力関係を育んでいく、そういうところを描きたいと思い、Ⅶ組の面々は作られていきました。

――Ⅶ組の設立にはオリビエことオリヴァルトが関わっていますが、彼が目指している帝国の未来図的なものが、本作では明らかになるのでしょうか？

近藤：それはやっぱりありますね。今回オリビエについては、ずっと謎だった家族関係ですとか、彼自身が帝国内部でどのような活動をしているかというものは、帝国を描くにあたってやっぱり外せないところです。おちゃらけたイメージの大きい彼ですが、それはリベールにしてもクロスベルにしても、外国での姿ですので、自国に戻ったあとにどう振る舞っていくのかというものが今回目の当たりにしていただけるかと思っています。やっぱりおちゃらけているかもしれませんし、そうではないかもしれません（笑）。

――ちなみにオリヴァルト自身は継承権を放棄していますが、社交界にはデビューしています。帝国民から見たオリヴァルトは、どのように映っているのでしょうか。

近藤：オリビエが帝国内である程度の知名度を得たのは、やはりリベール事変ですね。詳しいことはゲーム内でもきちんと描かれていますので、楽しみにしていただければと思います。

――本作の敵として帝国解放戦線が登場しますが、シリーズの流れとしては《身喰らう蛇》が幻焔計画を推し進めています。本作で、幻焔計画が関わって来るのでしょうか？

近藤：流れを考えていけば、関わってこないはずがないですよね。ですが、大きく描かれているのは革新派と貴族派の対立です。でもあえてそうなっているのはなんでなんだろうなと考えていただければ、なんとなく想像ができるのではないでしょうか。



――オープニングで人型兵器が大量に出現しますが、あれは身喰らう蛇が作ったものなのでしょうか？ それとも、古代ゼムリア文明の遺産なのでしょうか？ また、オープニングには鳥と女性、黒い鎧の人物など、キーパーソンとなりそうな人物が登場しますが、彼らについても教えてください。

近藤：まず人型兵器ですが、そのデザインに着目してほしいですね。これまでにシリーズの中に登場した人型兵器、例えばパテル＝マテルをはじめとするゴルディアス級。古代の遺物である『FC』のラスボス・トロイメライ。それらとデザインの共通点がないんですよ。黒い人物に関してはノーコメントです（笑）。ですが、かなり序盤から登場しますし、正体もきちんと提示されますので、ゲームをプレイして確かめていただければと思います。

――オリヴァルトや怪盗B、そしてトヴァルなど、シリーズファンには注目の人物が登場する『閃の軌跡』ですが、ほかにはどんな人物が登場するのでしょうか？

近藤：レクターをはじめとする軍に関係した人物は出てくるかと思います。特にレクターは、彼が《鉄血の子供達》として行動する姿を実際に見ることができるのは今回が初めてだと思いますので、その辺りは注目していただければと思います。

――帝国といえばやはり《鉄血宰相》が象徴的な人物としていると思うのですが、彼の子飼いである《鉄血の子供達》については、本作は明らかになるのでしょうか？ また、レクター、クレア以外に、子供達関連の人物は登場しますか？

近藤：《鉄血の子供達》に関してはまだまだ作中でも謎が多いですね。ですが、子供『達』と言うからには、他にも何人かいるわけです。そういう意味では、作中にも出てくるということがあるかもしれませんね。

――ちなみに今回初登場のクレア憲兵大尉は、初めから《鉄血の子供達》として紹介がされていました。こちらの狙いはどのようなものになっているのでしょうか。

近藤：貴族の支配している地域では領邦軍が幅を利かせているんですよ。ただそれを、オズボーンがそのまま放置するわけにはいきませんよね。やはりそれを牽制する組織が必要があります。そういう意味を含めての鉄道網の敷設になってくるわけです。鉄道網を通じて各地方の貴族を牽制する組織、それを束ねる人となると、オズボーンの腹心である必要性があります。そういった中でクレアというキャラクターが生まれてきました。

――テーマとかぶってしまうところもあると思うのですが、本作のストーリーでとくに注目してほしいポイントなどありましたら教えてください。

近藤：一番注目してほしいのはやっぱりⅦ組のメンバーですね。彼らが帝国の抱えている問題にそのまま通じる関係であること、そしてそれがどう変わっていくのかというものがやはり彼らの物語の軸になっていますからね。彼らがまずは仲間の中で起きる問題に立ち向かっていき、それがやがて帝国に通じる問題に関わっていく姿が、今回の主軸になりますので。

――改めて、Ⅶ組の面々の立ち位置を教えていただけますか。リィンは貴族派でも革新派でもない出身のように見えますが。

近藤：リィンに関してはゲーム内でも実際にそのような立ち位置で、貴族にも平民にも声をかけられるような立ち位置になっていますね。サラがリィンに対して、「あなたはⅦ組の中心ではなくて重心だ」と言うシーンが作中にもあったりします。

一番注目してほしいのはやっぱりⅦ組のメンバーですね。

ユーシスは貴族派の代表ですよね。逆にマキアスは革新派の代表的な立ち位置です。アリサはラインフォルト社という、平民とはいえ帝国においても大きな位置を占める大企業の出身になっています。エリオットは軍関係者ですね。ガイウスは遊牧民族の出身ですが、帝国の歴史というものに大きく関係しています。帝国の初代皇帝はドライケルスという人物なのですが、彼は遊牧民族の力を借りていたんです。そういう意味では、帝国の外から、帝国を見続けていた人たちということになります。エマに関しては、やはり帝国は大きな国ですから、よく分からない力を持った人も暮らしていると、そういう人たちの視点となります。ある意味それは普段帝国の人たちが貴族派だ革新派だという話をしている中で、もっと昔のところに起源があるわけですよね。ラウラはユーシスとはまた違った貴族で、伝統に裏打ちされた武門の出ということになります。誇り高く潔白な、古き良き貴族の姿ですね。フィーに関しては、物語序盤では一切伏せられているんですが、帝国の抱える問題から派生した人生を送っているんですよ。9人という人数は一見多いように見えるかと思いますが、これはかなり厳選した形なんです。逆に言うと、帝国を見ていくにあたり、最低でも9つの視点が必要だということが、帝国がいかに巨大で強大な国であるのかというものを、物語っているのではないかと思います。

――Ⅶ組の生徒たち以外にもサラ教官など、パーティー入りをするような気になるキャラクターたちがいますが、彼らについても教えていただけますか。

近藤：サラは士官学院でⅦ組の担任なのですが、どうにも軍人ぽくないというのがポイントで、過去があると。そこは物語を進めていくにつれて、リィンたち自身が気づきますし、本人の口からも語られるかと思います。クロウやアンゼリカ、トワ、ジョルジュといった先輩たちは、過去にあることがあり集まることとなったのですが、その立場から、リィンたちを見守っています。あと、クロウでいえば学校にいる不良の先輩をイメージしてもらえればいいかなと思います。授業もサボりがちですしね（笑）。ですが、どうやら悪い人ではないだろうということは言えるかと思います。

――ミリアムに関しては、恐らくパーティーインするのではと見られていますが、キャラクターデザインや彼女の操るアガートラムを見るに、今までの「軌跡」シリーズとはかなり異質なキャラクターに見えます。こちらはいかがですか？

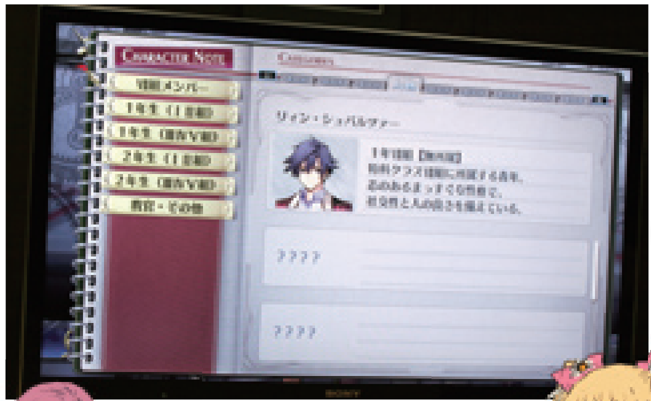
近藤：まさしく異質なものというコンセプトです。ミリアム本人もアガートラムも、その出自もですね。

――最後に、ファルコムマガジン読者に今後の展望を含めたメッセージをお願いします。



近藤：月並みにはなりますが、グラフィックもキャラクターも物語もすべてが新しい「軌跡」となります。そういった中でも「知っているぞ」という部分も、特にファルコムマガジンの読者の方々には見つけていただけるものとなっています。今まで伝え聞いていた帝国が「本当はこんな国なんだ」という驚きもあると思いますし、イメージ通りではあるけれどその想像の上を行く事件が起きたりしていきます。ぜひプレイして楽しんでいただければと思います。よろしくお願いします。

トールズ士官学院の 気になるサブキャラをチェック！







1年Ⅳ組

リンデ

美術部に所属する、ピンク髪が印象的な女の子。同じ部活のガイウスのことを「ガイウス君」と呼んでいる。２人の関係がどうなるのか気になるところだが!?　双子の妹もいる。



1年Ⅰ組

マルガリータ

とある男爵家の娘。縦ロールの入った髪にツインテールとパーフェクトなお嬢様スタイルの彼女は、その容姿のインパクトは学院No.１！　女子力がかなり高く、ゲーム中ではかわいい一面（？）を多数見ることができる!!



1年Ⅰ組

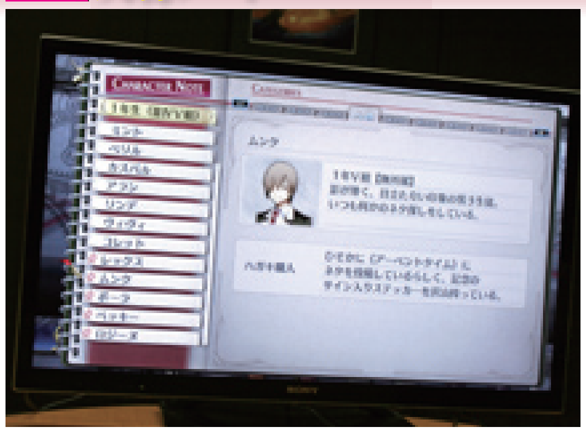
パトリック・T・ハイアームズ

四大名門の１つ、ハイハームズ侯爵家の息子。同じ貴族ということで、リィンにちょっかいを出してくる。口だけのキャラと思いきや、出自に負けないだけの実力は持っているようだ。

SYTEM CHECK

新たなやり込み要素 人物ノート

生徒手帳の「人物」の項目ではトールズ士官学院の《VII組》メンバーをはじめ、１年と２年の生徒、教官や学院関係者らのプロフィールを確認可能。プロフィールは物語の進行や、会話の有無、関連したクエストのクリアなど、さまざまな条件で埋まっていく。見逃さないようにこまめに会話などを行おう！



↑記載されるプロフィールは、キャラクターごとで異なる。なお、コンプリートした際は名前の前に★マークがつく。



2年V組

ドロテ

文芸部の部長をしている平民生徒。想像力豊かで、興奮をすると鼻血を出すクセがある。新入生のエマを自分の趣味の世界に引きずり込もうと画策中！



1年II組

フェリス・フロラルド

ラクロス部に所属する貴族の女子。マルガリータに負けないお嬢様スタイルで、しかも高飛車で負けず嫌いという、ある意味わかりやすいキャラ。いわゆるツンデレ？



2年I組

ヴィンセント・フロラルド&サリファ

フェリスの兄の貴族生徒。見た目とおりのナルシストで、例えば「エスコートの貴公子」など、自分のことを何かに付けて〜〜の貴公子と言う。常にお付きのメイドのサリファを付き従えている。本作における『軌跡』シリーズではおなじみのお供付きキャラで、本人はボケキャラ、メイドがしっかりもののパターン。

今月のこの1枚

ほかにも個性的なサブキャラが多数登場！

「人物」ノートに名前のあるトールズ学院関係者以外にも、個性的なキャラクターは多数存在！『軌跡』シリーズの魅力といえば、ほかのゲームでは記号的に置かれがちな町や村の住人にも、しっかり名前がついていて、ドラマが用意されていること。もちろん、『閃の軌跡』でもそれは変わらない。行く先々で出会うキャラクターたちと会話などをして、エレボニア帝国での冒険を楽しもう！



←要塞に続く山道に立つ男性。何か困ったような顔をしているが……？どこかで見たことのある服装なのも気になるところ。



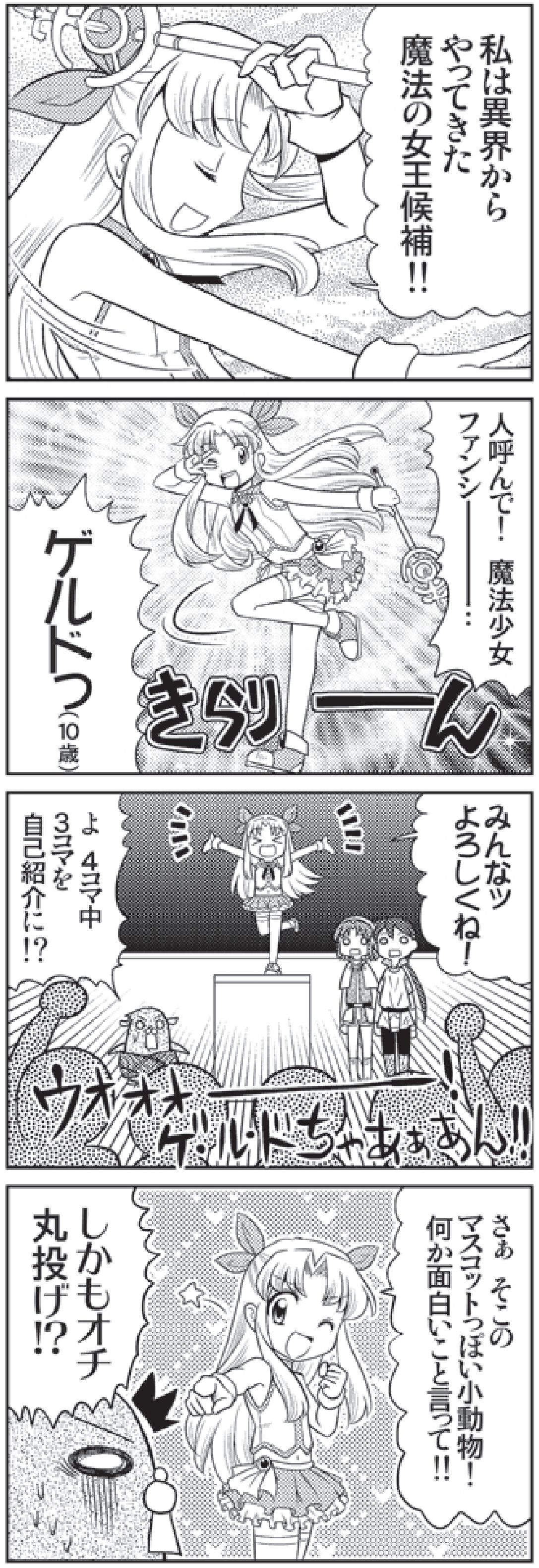
みんな集まれ! ファルコム学園

新久保だいすけ

変わり果てた彼女



光臨! ファンシーゲルドちゃん



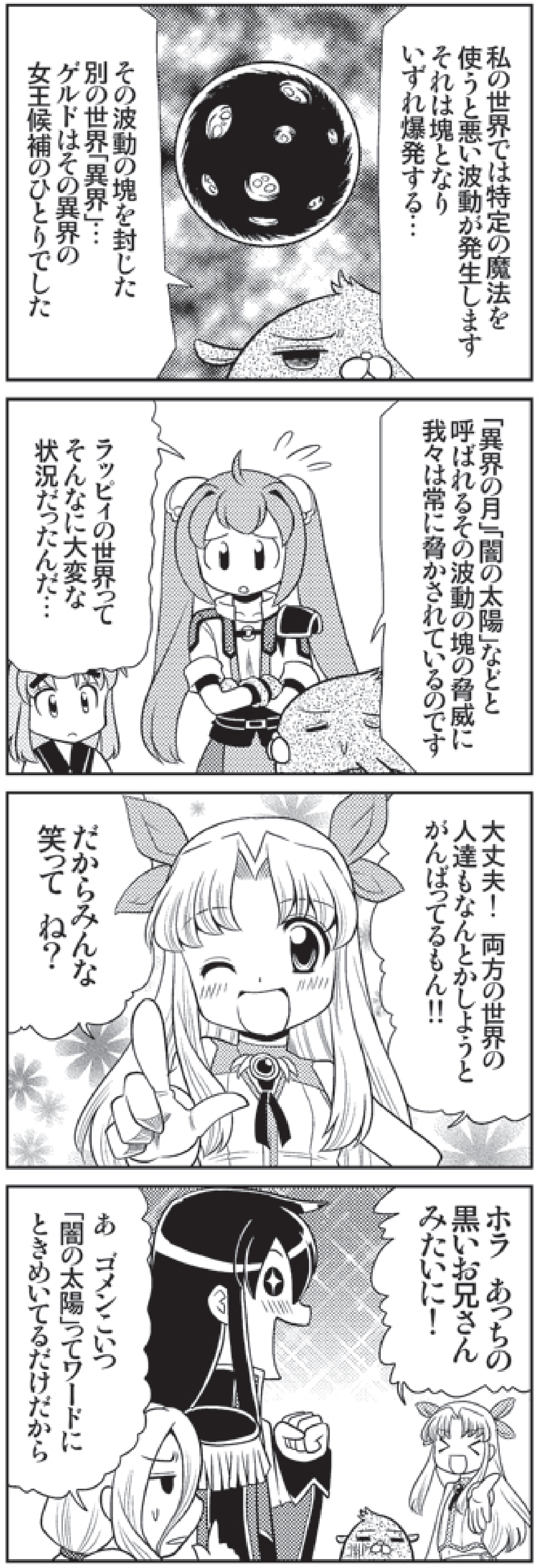
白き魔女



絶望の剣帝



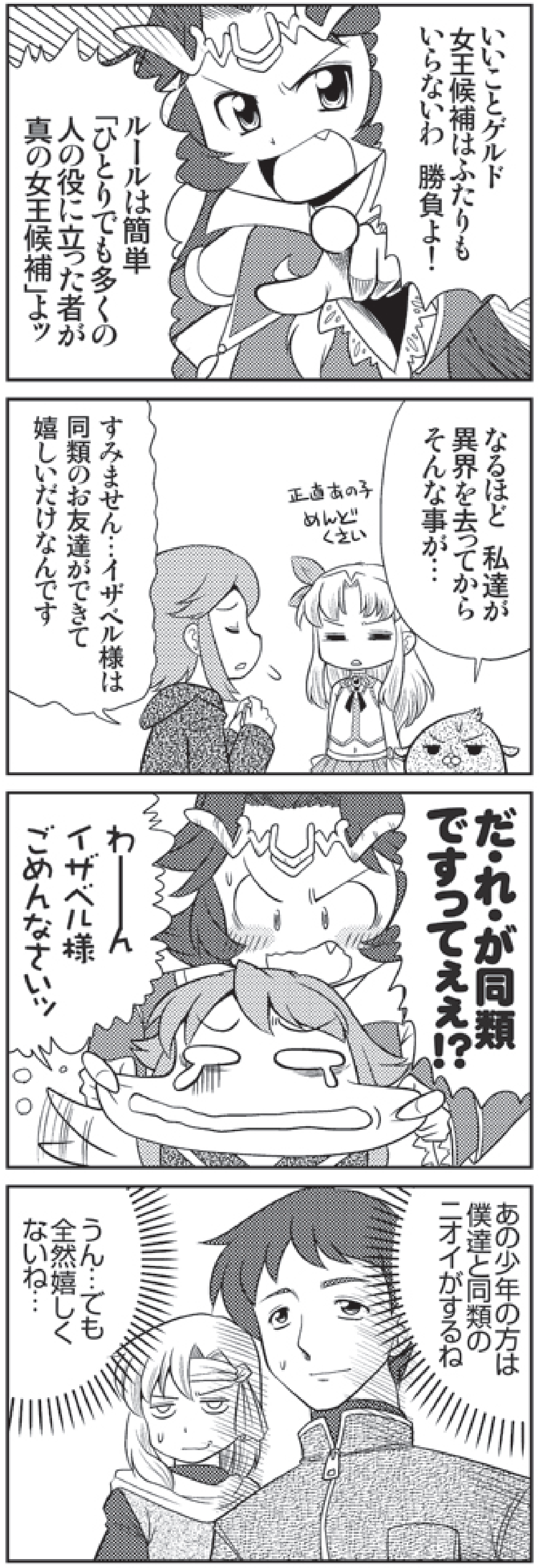
ラッピィの世界



お供の役目



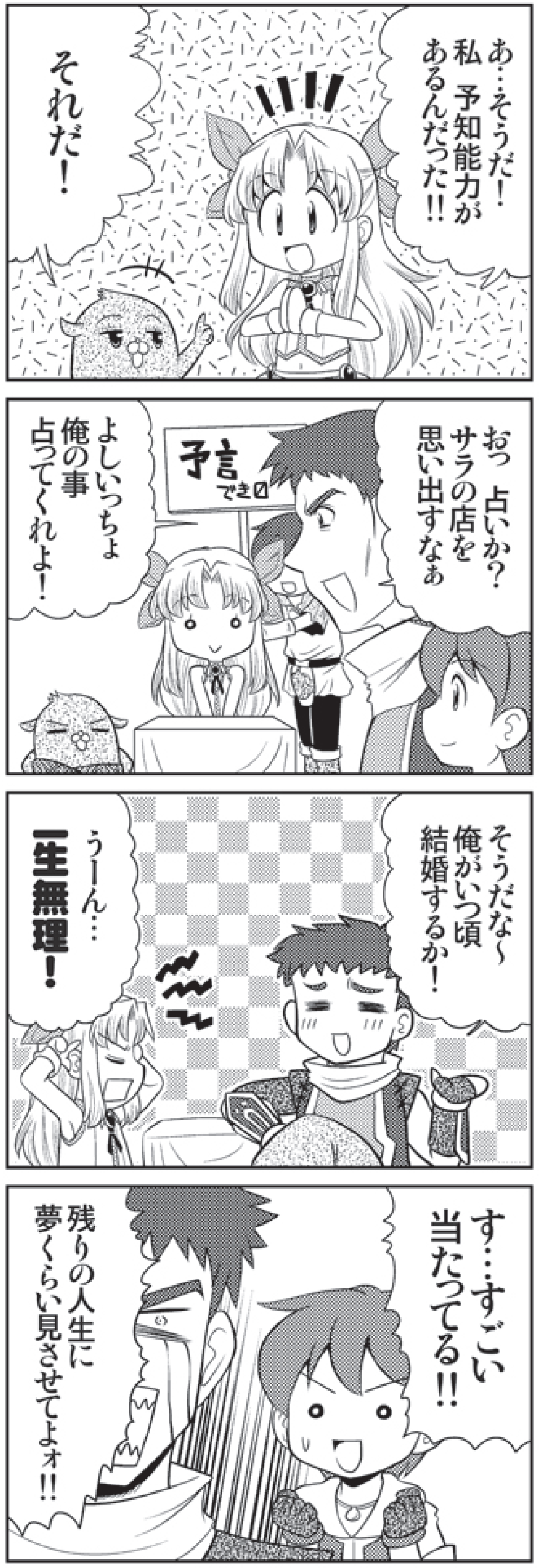
同　類



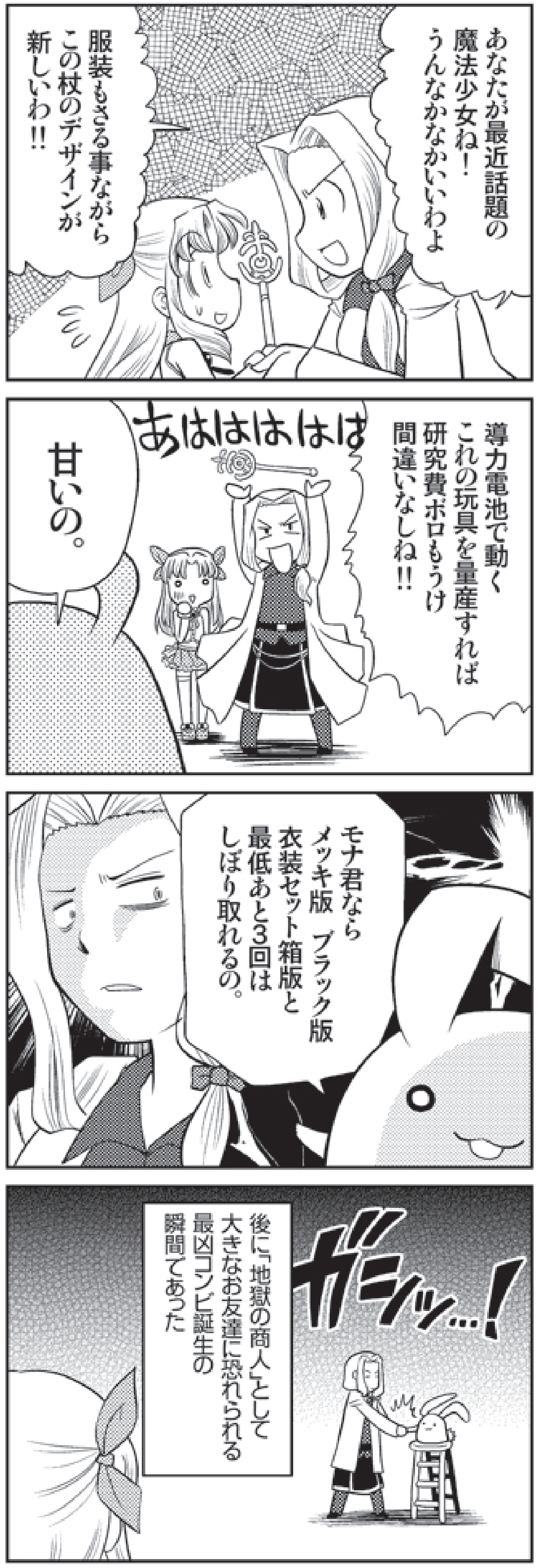
魔法少女のお仕事



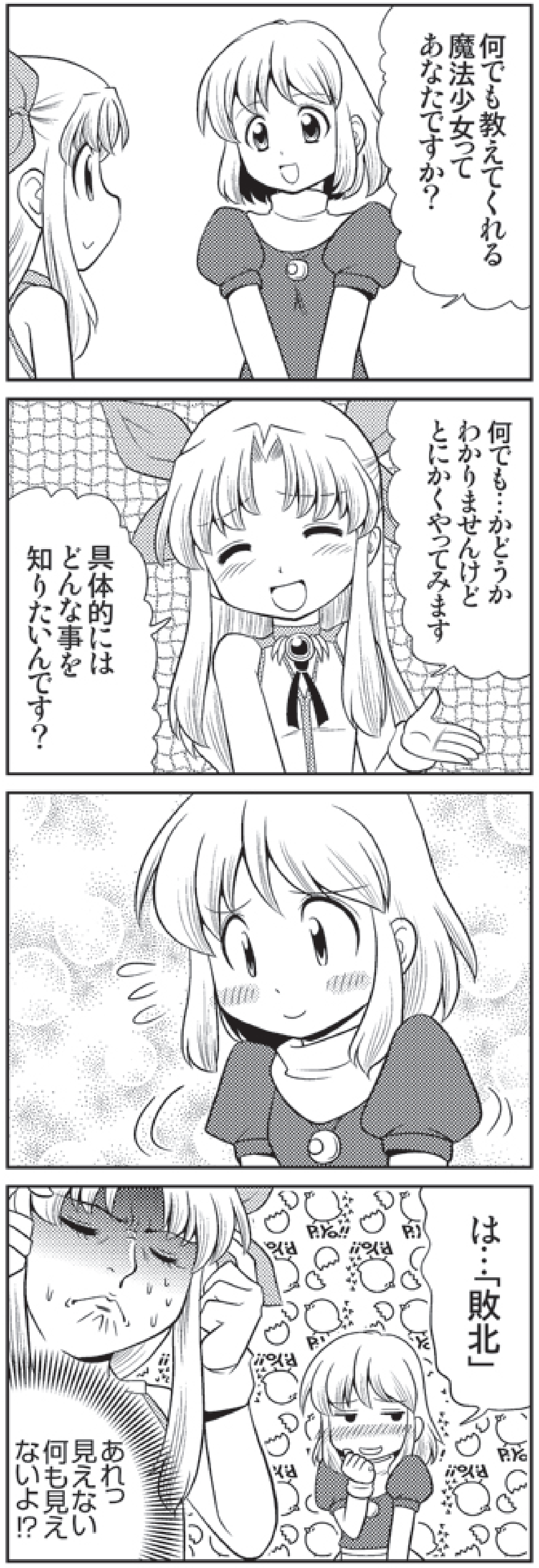
ゲルドの大予言



エリカとモナ君



エレナの知りたい事



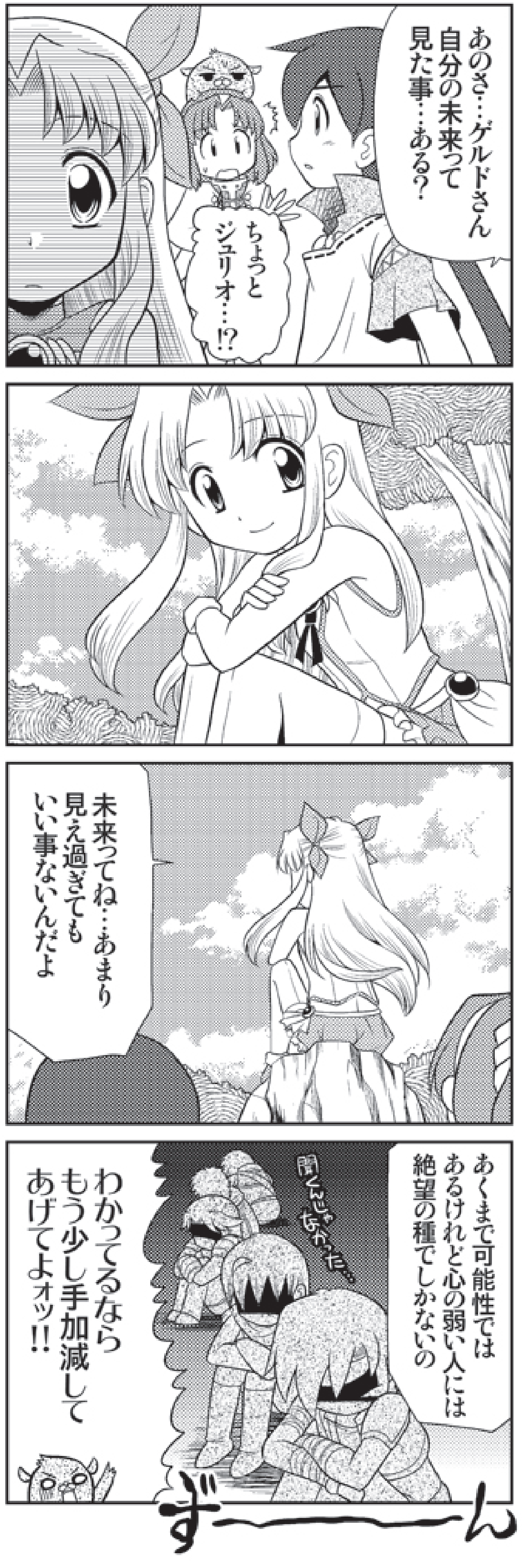
リア充と可能性



魔物の立場



ゲルドの未来



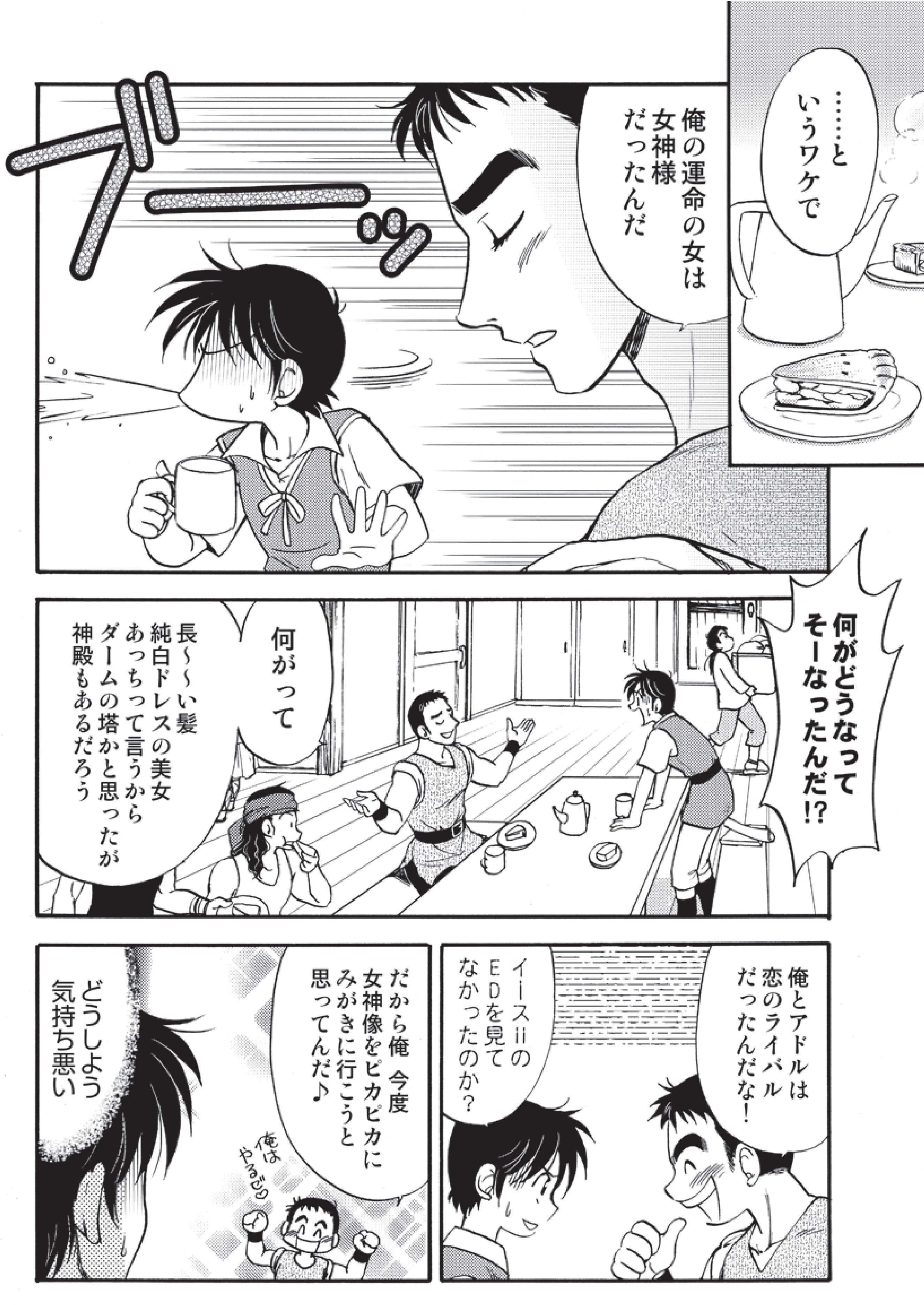
イザベル様の名案




地元に帰ろう
ふしみゆうり
私は占い師サラ
得意分野は恋愛占いです
ドバーン
ねーさーん サラ姐さーん
最近はドギ専属になりつつあります
今日も来やがった
チッ
昨日 廃坑の奥まで行ったけどよー見つかんなかったぜ
俺の運命の女!!
あらそう残念ね
チッ
あなたは占いで彼女探しなんて向かないのかもネ
何言ってんだよプロだろ姐さんは〜


せめて背格好を占ってくれよ探しようがないよ
わかったわ
髪は長いわ そうね…腰よりも長い…
顔立ちが整った清楚な美女…
真夏でもスソの長ーい服を着ているわ…
そ それって
ドキ ドキ ドキ
姐さんのことか？
ピキッ
その人は純白の服を着ているわ
へー そっか〜
で どこにいるんだ その女は！
この街か？ ゼピックの村か？
わくわく
え――――と…

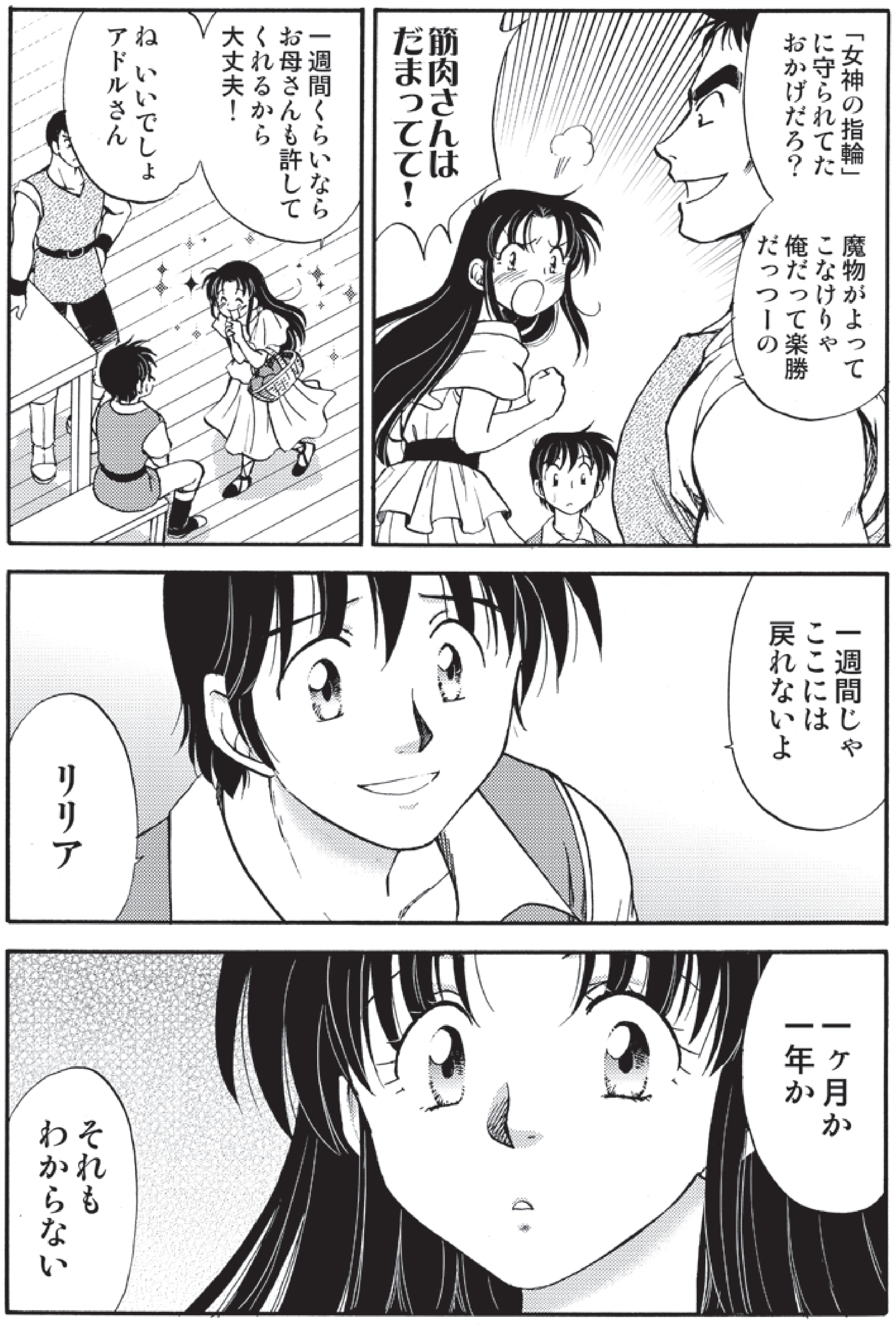

あっちよ
へ？ あっち？ どっちだよ
？
はっ
ま まさか ダームの塔かっ!?
まぁ…
あっちとしか言えないわね
あなたには危険すぎるミッションよ あきらめなさい
や やる 俺は やるぜっ
俺はやるぜ――――っ!!
ドドドドド
くまなく じっくり 見つかるまで 探しなさい

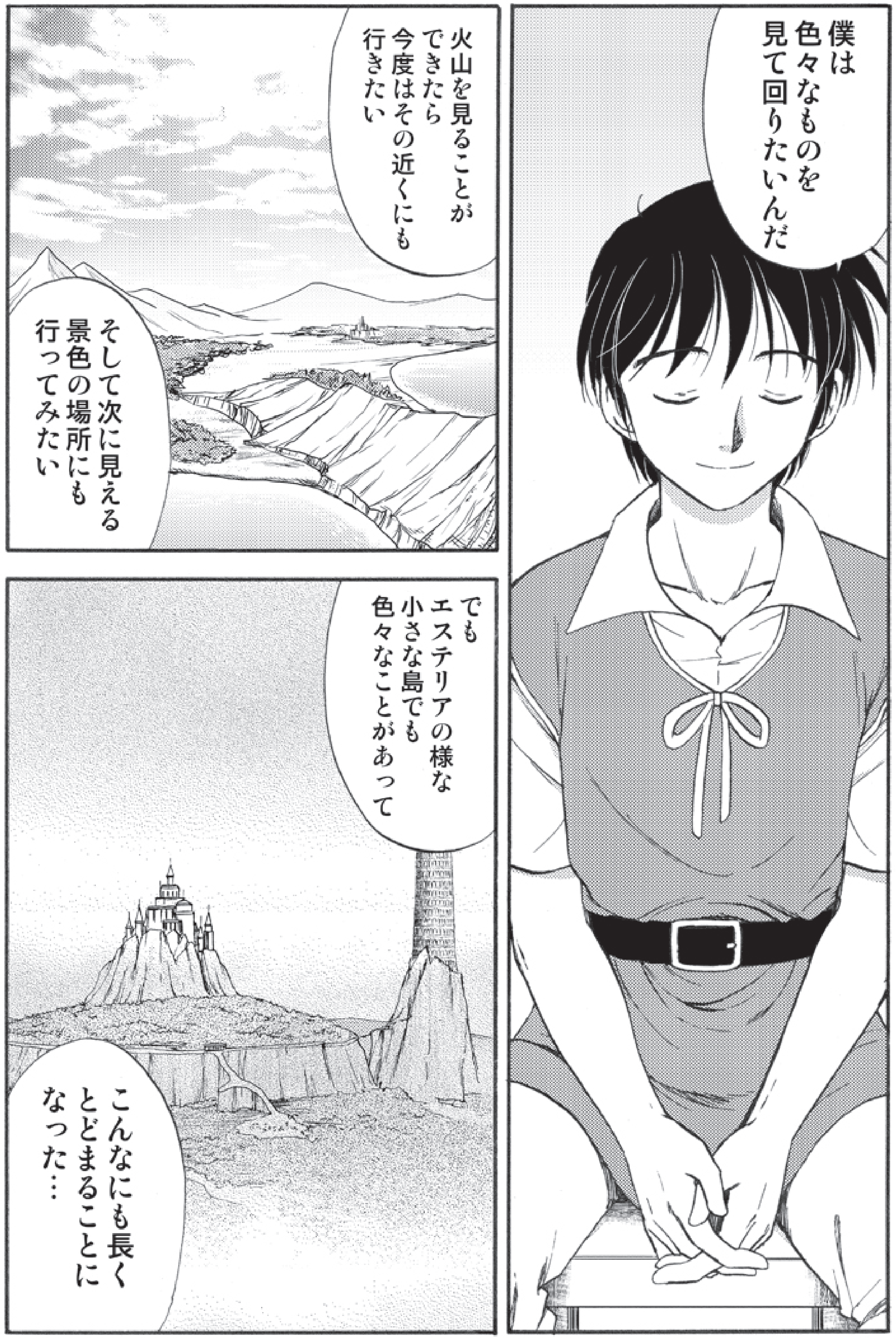

……と いうワケで
俺の運命の女は 女神様 だったんだ
ブーーッ
何がどうなって そーなったんだ!?
何がって
長〜〜い髪 純白ドレスの美女 あっちって言うから ダームの塔かと思ったが 神殿もあるだろう
俺とアドルは 恋のライバル だったんだな!
イースIIの ＥＤを見て なかったのか?
だから俺 今度 女神像をピカピカに みがきに行こうと 思ってんだ♪
俺は やるぞ
どうしよう 気持ち悪い


ドギ あのさ…
3日後 プロマロック行きの 定期便が 復航するだろ
僕は それに乗って ここを出るよ
何…!?
前に故郷の話をして くれただろ あの時から 興味がわいて 調べていたんだ
火山が どうしても 見たくってさ
ただ細かな道は わからないから ドギに聞こうと 思って——
バカ野郎っ


俺がそんな地図見て道順示せるとでも思ってんのか？
お前は方向オンチだからな
ちげーよ親分っ
俺も誘えよアドル！
案内役はまかせろ！
ドギ…
あたしも行くっっ！


リリア!?
なんで盗賊(ヤローども)の家に!?
だってココのおじさん達あたしの作ったリンゴのお菓子喜んで食べてくれるんだもん♪
手作り手作り～
女子の手作りおかしぃ～
あたしも冒険できるのよ
なんせイースの中枢まで行ったことあるんだから！
ふふふーん♡


「女神の指輪」に守られてたおかげだろ？
魔物がよってこなけりゃ俺だって楽勝だっつーの
筋肉さんはだまってて！
一週間くらいならお母さんも許してくれるから大丈夫！
ね いいでしょ アドルさん
一週間じゃここには戻れないよ
リリア
一ヶ月か一年か
それもわからない

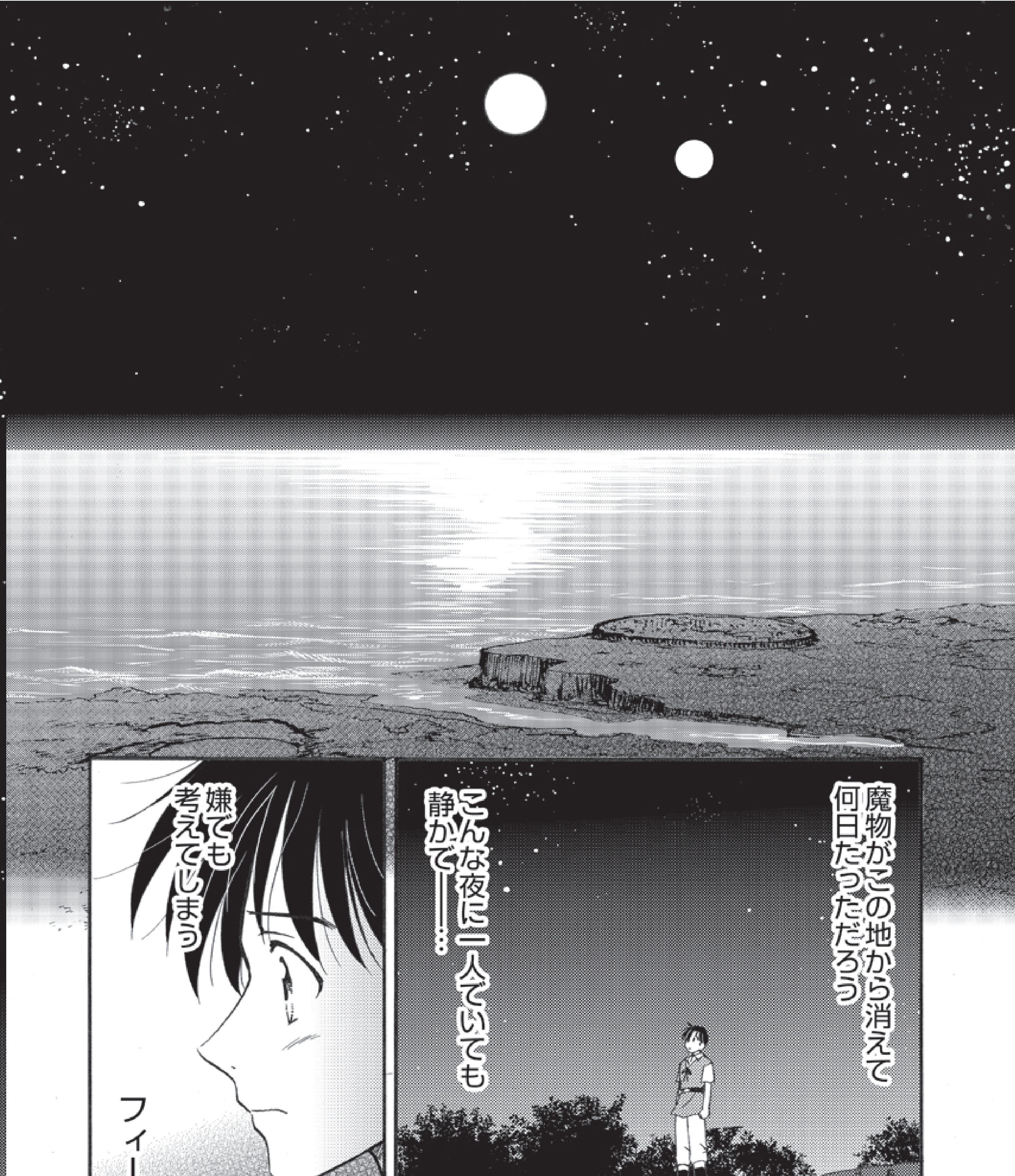

僕は色々なものを見て回りたいんだ
火山を見ることができたら今度はその近くにも行きたい
そして次に見える景色の場所にも行ってみたい
でもエステリアの様な小さな島でも色々なことがあって
こんなにも長くとどまることになった…


これから行く場所だってきっと同じくらい
もしかしたらもっと時間がかかるかもしれない
そんな勝手気ままな旅にリリアをつきあわせるワケにはいかない
ごめん
アドルさんはもうここには帰ってこないの？


僕の故郷はここじゃないよ
まぁ故郷にも全然帰ってないんだけどさ
あははははは
俺もだっての


お前なー
リンゴだって投げたら
立派な凶器だぞ！
ダッ
怒らせちまったな
はい…
でも きっと
わかってくれたし
これで安心して
出発できます

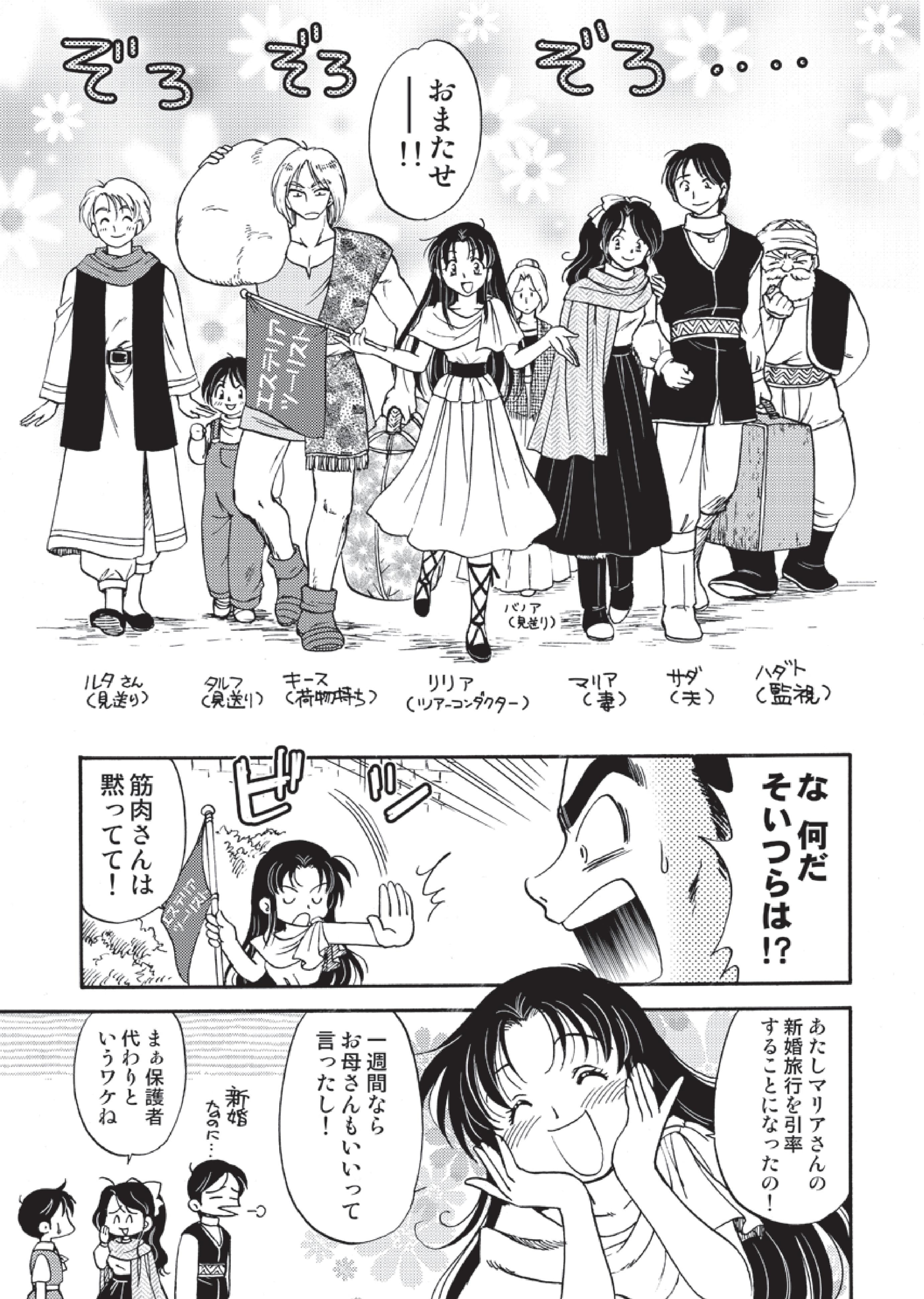

は？
旅に出たい？
しかも
無期限？
バカを言いでないよ
病気の時は普通に
心配していたけど
ハー…
決意の正座！
まさか元気に
なった途端
家を飛び出して
新たに心配させて
今度はこの国を
飛び出すって…
お前 私の寿命を
何年縮めりゃ
気がすむんだい！
だめだめだめだめ
ぜーーったいダメよ！
むーっ


魔物がこの地から消えて
何日たっただろう
こんな夜に一人でいても
静かで――……
嫌でも
考えてしまう
フィーナ…

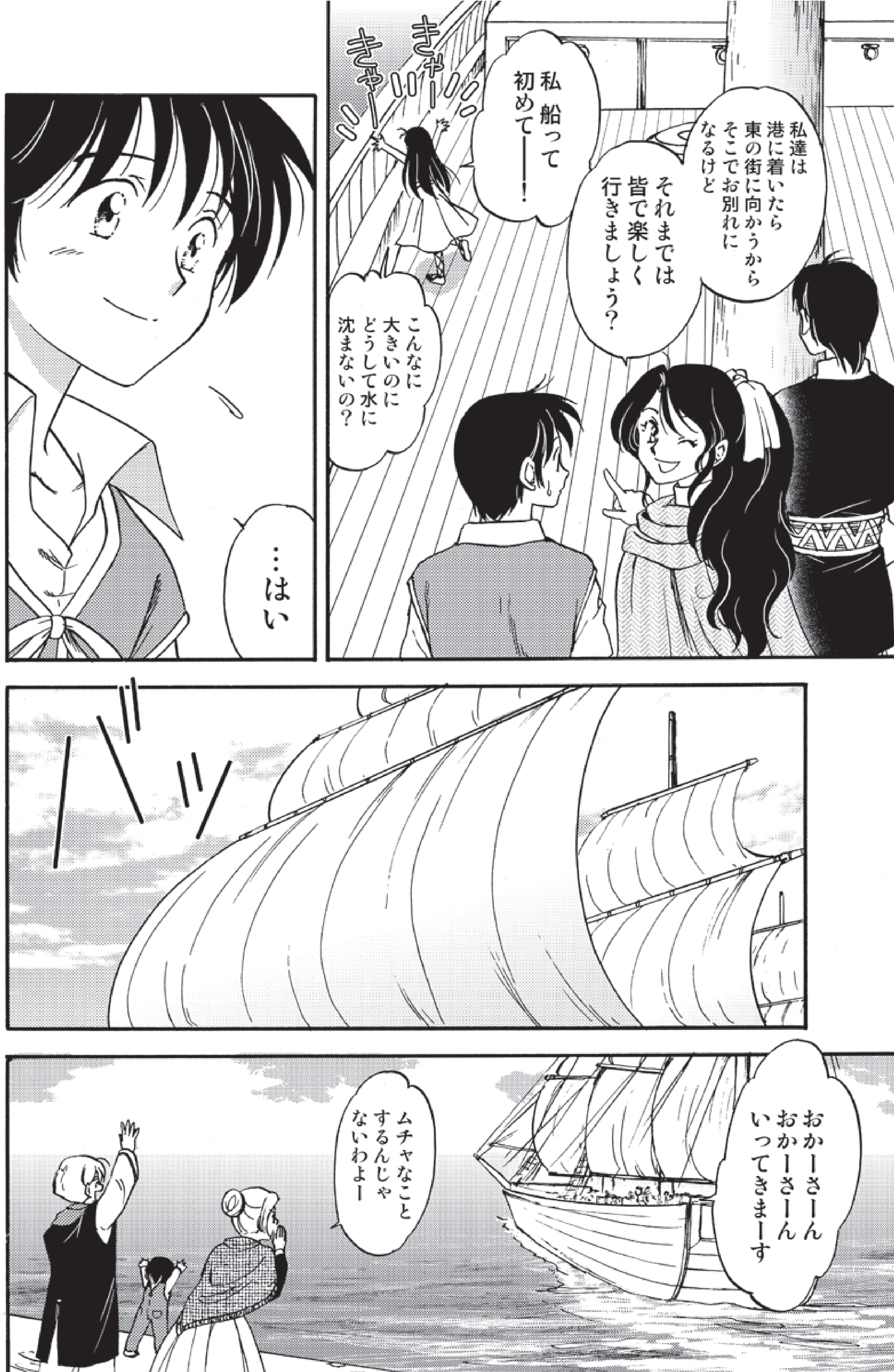

僕は立ち止まったら
ダメなんだ
フィーナがくれた
この静けさに
甘えてはいけない
前に進むんだ――

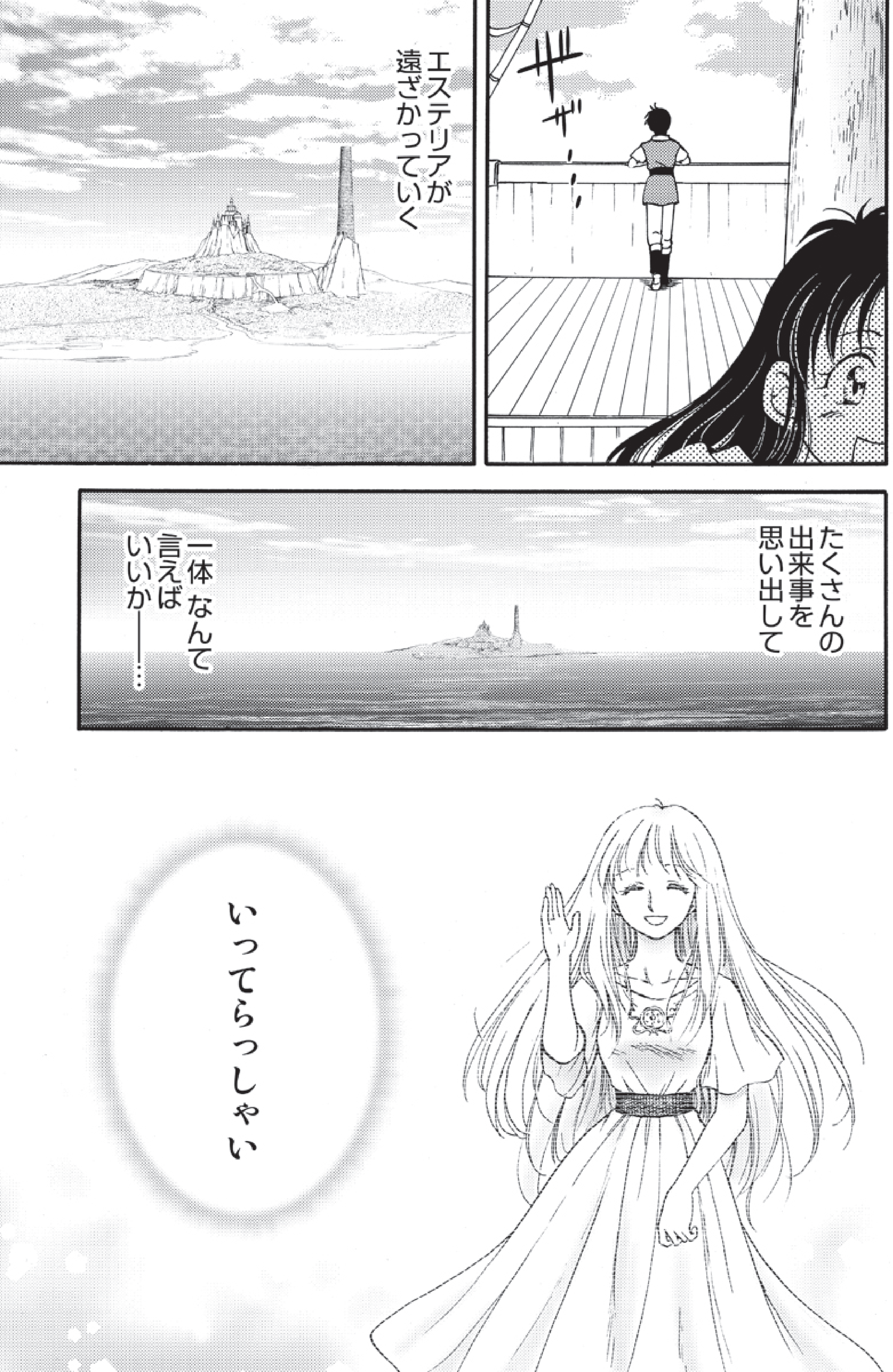


なんだアドル荷物はそれだけかよ？
そうだよ
見えねーぞおい
俺は故郷への手土産が多くてこんなんだぜ！
手土産は一つにしておけ後は全部置いていけ
ぽん
ぽん
えー…
餞別はやるからよ
ありがとな親分！
ムダづかいするなョ
アドルさーーん



ぞろ ぞろ ぞろ….
おまたせ——!!
ルタさん（見送り）
タルフ（見送り）
キース（荷物持ち）
リリア（ツアーコンダクター）
パノア（見送り）
マリア（妻）
サダ（夫）
ハダト（監視）
な 何だそいつらは!?
筋肉さんは黙ってて！
あたしマリアさんの新婚旅行を引率することになったの！
一週間ならお母さんもいいって言ったし！
まぁ保護者代わりというワケね
新婚なのに…


私達は港に着いたら東の街に向かうからそこでお別れになるけど
それまでは皆で楽しく行きましょう?
きゃーーー
きゃーーー
私船って初めてーー!
こんなに大きいのにどうして水に沈まないの?
…はい
ババ
おかーさーん おかーさーん いってきまーす
ムチャなことするんじゃないわよー


エステリアが遠ざかっていく
ザザ…
たくさんの出来事を思い出して
一体なんて言えばいいか――……
いってらっしゃい


FB ファルコムBOOKS
空の軌跡外伝
レーヴェ物語
作画：楽時たらひ　脚本：田沢大典
『空の軌跡』が始まる――
もうひとつの
原作：日本ファルコム
（『英雄伝説 空の軌跡』）
価格：893円(税込)
ISBN:978-489610-224-6
『英雄伝説 空の軌跡』の人気キャラクター・《剣帝》レオンハルトの過去を描くアウターストーリーのコミカライズ。彼はいかにして《身喰らう蛇》に与みし、数奇な運命を辿ったのか。レオンハルトの目線から見たもうひとつの『空の軌跡』の物語が始まる！
©Nihon Falcom Corp. All right reserved.
全国書店にて大好評発売中!!
発行：フィールドワイ
発売：メディアパル
フィールドワイのHPはこちら
www.field-y.co.jp


いってきます
Fin



啄木鳥しんき
ファルコム大好き!
『空の軌跡(FC)』 遊んだのはWin版とPSP版。
私事ではありますが…
この度、連載してきました空の軌跡の漫画版が最終回を迎えました。
お世話になりました日本ファルコムの皆様、編集担当の皆様、
制作を手伝ってくれたスタッフと、読んでくださったすべての方々に、
御礼申し上げます。本当にありがとうございました。
最終巻になる単行本6巻は、2013年10月10日に発売予定です。
どうぞ…よろしくお願い致します！

コテ放題

コテカナことjdkBANDボーカル小寺可南子がゲームと共に、好き放題な日々のことを描くコラム!!

▶PROFILE



日本ファルコムのゲームソングを奏でる専属バンド"jdkBAND"のボーカル。webラジオ「ファルコムラジオ"めんどくさいです…でもがんばります"」では声優水橋かおりさんと共にパーソナリティをつとめる。その他CMソング、ジングルなど活動は多岐に渡る。twitter @cana_ko_tera

第9回　千里の道も……

まいどドウモみなさま！　小寺可南子です！　「閃の軌跡」もついに発売になりましたね！　最近すっかり涼しいし、ゲームに集中するにはピッタリの気候ではないでしょうか。それと同時に風邪をひきやすい時期でもあるので、体調にしっかり気をつけながらゲームをしたいものですね！　とか言ってる私自身が風邪ひいちゃいまして…治るの時間かかりましたよ〜。でも

そのおかげで（?）、「碧」をけっこう進めることができました！　二章の2日目なうです！　ここいらでちょっと碧を休憩して、閃をプレイしたいなぁ…なんてね！　あ、いや冗談だからね鬼編!!（汗）







閃を早くやるためにも碧をがんばって!!



2011年10月から好評配信中のWEBラジオ『ティオのファルコムラジオめんどくさいです…でもがんばります』の舞台裏をこっそりお届け♪

ティオのファルコムラジオめんどくさいです…でもがんばります
■配信日　毎週金曜日、公式HP、ランティスラジオ、ニコニコ動画にて更新。
■メインパーソナリティ　水橋かおり（『碧の軌跡』ティオ・プラトー役）　小寺可南子（『ファルコムjdkバンド』ボーカル）
■公式ホームページ　http://www.falcom-radio.com/

第98回-第99回

水橋かおり（『零の軌跡Evolution』ティオ・プラトー役）
小寺可南子（ファルコムjdk BAND・ボーカル）

98-99回はパーソナリティの水橋かおりさんと小寺可南子さんを、それぞれゲストとしてお迎えするという一風変わった構成に。普段はゲストの方々をいじりにいじっているおふたりが、逆にいろいろといじられてしまうという展開に、コテさんは特にタジタジ。しかしそんな中で、ラジオ企画がスタートしたときの裏話や、ラジオメンバーの仲のいい雰囲気が充分に感じ取れるアットホームな収録回となった。「しれん課」のコーナーは久々のイラスト企画に。支援課見習いの相変わらず（？）のクオリティが披露された。

▶第98回-第99回の舞台裏◀

100回はスペシャルなものにしたい！ということから、変則的な編成で行なわれた今回。この時点では、小寺さんには100回がどうなるのかがまったく伝えられていない状況が続けられていた。まさかこんなことになるとは……なコテさんの様子は一見の価値あり！

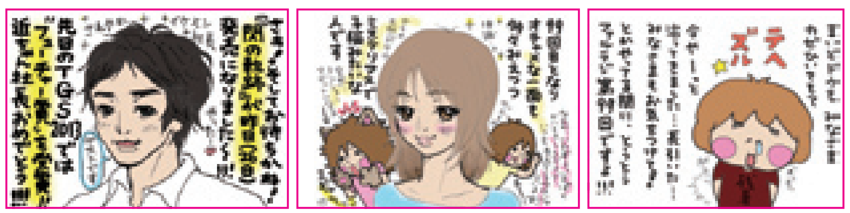
第100回-第101回

近藤季洋（日本ファルコム株式会社・代表取締役社長）

2011年9月のニコニコ生放送特番から2年。ついに100回を迎えたファルコムラジオ。そのゲストはなんと日本ファルコムの近藤季洋社長。東京ゲームショウ、そして『英雄伝説 閃の軌跡』発売直前という、ラジオにとってもファルコムにとっても特別な回となった。まずはゲストの登場しないオープニングがスタート。その間、近藤社長はスタッフ側の席で待機。水橋さんの突然の呼び込みで初めてゲストがいると知った小寺さんの様子はファルコムラジオのホームページにも写真が載っているので一見の価値アリ！

▶第100回-第101回の舞台裏◀

社長ご自身が制作レポートを連載していたSCEのコミュニティサイト「プレコミュ」のスタッフの方々も、100回ということで取材に訪れており、スタジオは前代未聞の満員状態に。「プレコミュ」の方には写真やコメントつきでその時の姿が掲載されているのでチェックしてみよう。



今月のコテガキ

毎週更新とともに発表される、小寺さん直筆の「コテガキ」を少しだけご紹介！

人生半キャラずらし

jdkバンドのドラマー・オカジがファルコムと音楽と人生について熱く語ります！

「激動の東京ゲームショウ2013～迷いの森（FalcomMusicChronicle）

昨日4日間にわたる東京ゲームショウが幕を閉じた。

ファルコムとしては、なんと今回が初の単独出展。新作「閃の軌跡」は見事、日本ゲーム大賞・フューチャー部門を受賞し、ブースは4日間通して大盛況であった。

いや本当に、この記念すべきタイミングで色々とやらせて頂けて大変光栄であった。

と、言うのも、今回の4日の間、ｊｄｋ ＢＡＮＤのライブはもちろんの事、ファルコムラジオの公開収録、ｊｄｋＴＶの公開録画、閃の軌跡の公開実況プレイ、そしてなんと、新作コラボレーションゲーム企画トークショーの司会なんていうものまでやらせて頂いたのであった。僕の人生においても、こんなに人前で喋り倒した4日間というのは人生で初めての経験だったので、本当に刺激的であった。

中でも、ｊｄｋＴＶの公開録画では、ファルコムの近藤季洋をゲストにお迎えし、念願の「白き魔女」の特集ができた。これは本当に嬉しかった。

ビジネスデイだと言うのに、ファルコムブースのステージには、ちゃぶ台と座布団が用意され、まるでお茶の間のような空間に。２０１３年にも関わらず、モニターには「白き魔女」Ｗｉｎ版の画面が映し出され、ちゃぶ台に用意されたＰＣを囲みながら和気藹々と語り合う我々は、さぞかし不思議に映った事だろうと思う（笑）。

白き魔女の話を笑顔で嬉しそうに語る近藤社長を見ていると、つくづくこの作品の事を本当に心から愛していらっしゃるのが分かった。とにかく、あまりにも濃く、ディープにこの作品の事を知り尽くしているのだ。実際、社長は大学生時代に白き魔女のゲーム内のテキストを全て大学ノートに書き写し、その経験からシナリオを書く事を学んだのだそうだ。あの膨大なテキスト量を思うと、なんと地道な作業なのだろうか。しかし、この経験こそが、あの軌跡シリーズを生み出す人物を創り上げたのだと思うと、このエピソードはあまりにも感慨深いものがあった。

もちろんまだまだ目からウロコが落ちるようなエピソードが山ほど語られたわけなのだが、この公開収録の一部始終は近いうちにｊｄｋＴＶで公開されるので、是非とも期待してお待ち頂ければと思う。

そんなわけなので、今回紹介したい楽曲は、今年発売になった「FalcomMusicChronicle」に収録されている「迷いの森」という曲だ。オリジナルは言うまでもなく、白き魔女の名曲である。これは僕がアレンジを担当させてもらったバージョンなのだが、僕としても白き魔女の世界観をさらに誇大妄想させ、違った解釈で切り込んだ意欲作なので、是非とも改めて皆様に聴いて頂ければと思う。

近藤社長とお話させて頂いて、僕が思う白き魔女という世界も決して間違ってはいないという自信がついた。いつかｊｄｋ ＢＡＮＤライブでもお聴かせできる日が来ると思うので、ＣＤを聴きながら予習しておいて頂ければ幸いである。

ではまた次回お会いしましょう！



FalcomMusicChronicle　発売中
5,229円（税込）
発売元：角川グループホールディングス
発行元：キャラアニ
© Nihon Falcom Corporation.
© Chara-ani

jdkTV
じぇいでぃーけーてれび

jdkTV好評
不定期配信中!

jdk BANDのドラマー岡島俊治さん、キーボーディストの上倉紀行さんを中心に、ファルコムの濃い～トークが繰り広げられるweb番組「jdkTV」は、ニコニコ動画で不定期配信中！　詳しくは**「jdkTV」**で検索！



岡島俊治（Okaji）

1979年6月9日生まれ
ドラマー/パーカッショニスト/作曲、編曲家/プロデューサー
洗足学園短期大学器楽科打楽器専攻卒業。
2000年、ロックバンド『HeadPhonesPresident』のドラマーとしてデビュー。
2005年、同バンド脱退後はフリーミュージシャンとしての活動を開始。様々なアーティストのサポート、レコーディング、プロデュース等を行う。
2008年より『ファルコムjdkバンド』に参加。
主な共演歴：jdk BAND、Sixh.Opera、HeavensDust、野宮真貴、植村花菜、CORE OF SOUL、DENIAL、安藤禎央、清田愛未、中村幸代、一純悠人、momokomotion、越尾さくら…etc



ファルコム楽曲4,118曲をiTunesで世界111ケ国に配信中。
(ファルコム楽曲はすべて高音質化、DRMフリーが適用されたiTunes Plusでの配信となります)

※iTunes配信中のコラム関連アルバム情報
【ミュージック フロム 英雄伝説Ⅲ
もうひとつの英雄たちの物語～白き魔女～】
iTunes配信価格：3,000円（税込）
収録曲数：全66曲

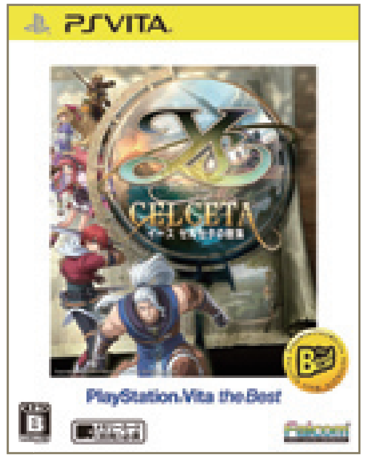
≪Falcom jdkバンドライブ特設サイトURL≫

http://www.falcom.co.jp/jdk/index.html

▶ファルコムニュース◀

ファルコムファンに贈る最新ニュースをピックアップ！





イース セルセタの樹海 PlayStation® Vita the Best

赤毛の冒険者アドル、樹海へ!

「イース」シリーズの生誕25周年記念作品として発売された『イース セルセタの樹海』がお買い求め安いPlaystation®Vita the Bestとして発売決定。自動でスキルを習得する「ひらめきシステム」や主人公アドルの記憶とリンクする樹海探索など魅力的なシステムが満載のA・RPGとなっている。10月10日発売。3990円(税込)。









ふぁるこむ フィールドざんまい

こだわりの名曲勢ぞろい!

コミックマーケット84で先行販売された「フィールドざんまい」が10月に一般発売開始される。シリーズ第5弾である今回はゲームには欠かせないファルコム屈指のフィールドミュージックをたっぷりとお届け。『碧の軌跡Evolution』始動記念のボーナストラックにはブラスバンドの生演奏による「Get Over The Barrier!」も収録。10月18日発売。2625円（税込）。



●CD情報

編曲：神藤由東大・岡島俊治・上倉紀行・大山智司演奏：小寺可南子（歌唱&作詞）/長野昭子・水谷美月（ヴァイオリン）/副田整歩（サックス）/神永大輔（尺八）/徳永延生（ハーモニカ）/上倉紀行（ピアノ&キーボード）/寺前甲・井上央一・宮崎大介・古川卓（ギター）/榎本敦・浜崎州平（ベース）/岡島星慈（パーカッション）/岡島俊治（ドラム）/BRASS EXCEED TOKYO／福井健太（コンサートマスター）

●収録曲

1．FIRST STEP TOWARDS WARS
〈イースI&IIクロニクルズ（イースI)〉
2．フィールド
〈ドラゴンスレイヤー英雄伝説〉
3．MOUNTAIN PATH
〈英雄伝説白き魔女〉
4．On The Green Road
〈英雄伝説零の軌跡〉
5．もっと近くで
〈英雄伝説空の軌跡FC～リベールの歩き方〉
6．一陣の風
〈イースセルセタの樹海〉
7．QUATERA WOODS
〈イースVI-ナピシュテムの匣-〉
8．砂の城
〈ソーサリアン・呪われたオアシス〉
9．Le Prelude Pour Xanadu
〈ザナドゥ〉
10.Get Over The Barrier!
〈英雄伝説零の軌跡〉

閃の軌跡×ファンタジーアースコラボレーション

『閃』のアイテムをゲットしよう!!

Windows®用MMORPG『ファンタジーアース ゼロ』と日本ファルコム最新作『英雄伝説 閃の軌跡』のコラボ企画が実施される。リィンやアリサなどⅦ組の装備はもちろん、サラ教官などの個性豊かなキャラクターたちのアイテムが多数登場する。9月30日定期メンテナンス終了後から10月28日定期メンテナンス開始前まで開催。詳細は公式HPまで→http://www.fezero.jp/collaboration/sen_no_kiseki/



英雄伝説 夢の軌跡

遊撃士たちと最強を目指せ!

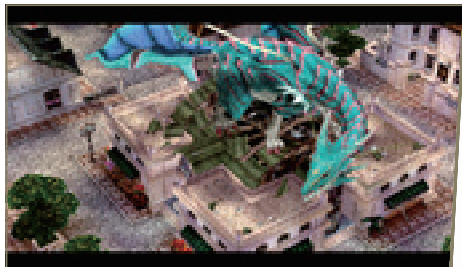
「軌跡」シリーズのキャラクターを集めて自分だけのパーティーが作れるソーシャルRPGがGREEでも配信開始！　シリーズ原作の物語に沿って展開されるファン必見の「クエスト」や他プレイヤーと戦える「闘技場」に挑み、最強のパーティを目指そう。キャラクター同士の相性も戦闘に反映されるぞ。基本プレイ無料、アイテム課金制でMobage、GREEで配信中。



空の軌跡PS Plusフリープレイ

あの名作が無料で楽しめる!

大人気「軌跡」シリーズの第2弾『英雄伝説 空の軌跡SC』がPlayStation®Plus フリープレイタイトルに登場。PlayStation®Plus会員の方であれば、期間中に誰でも無料で『英雄伝説 空の軌跡SC PSP the Best』がダウンロードできる仕様となっている。10月15日までの期間限定。詳細は公式HPまで→http://www.jp.playstation.com/psn/plus/







帝国といえばこの人!
オリビエの「軌跡」を振り返る!

ドラマCD
『英雄伝説 空の軌跡 オリビエ物語 ～未完成の叙事詩～』
シナリオ一挙掲載!



ついにエレボニア帝国を舞台とする『英雄伝説 閃の軌跡』が発売となった。帝国といえば、「軌跡」シリーズ第1作の『英雄伝説 空の軌跡FC』より登場し続けている「漂泊の詩人にして不世出の天才演奏家」オリビエ・レンハイムこと、オリヴァルト・ライゼ・アルノール皇子だ。そこで今回は、彼の軌跡を振り返る意味も兼ねて、2010年にキャラアニより発売されたドラマCD『英雄伝説 空の軌跡 オリビエ物語 ～未完成の叙事詩～』のシナリオを一挙掲載! 彼が真に目指す第3の道とは? これを読んで『閃』をプレイすれば、より楽しめるはずだ。

■商品情報
『英雄伝説 空の軌跡 オリビエ物語 ～未完成の叙事詩～』発売中
発売元:キャラアニ
価格:3,150円(税込)

■空の軌跡外伝
未完成の叙事詩(仮)

○キャスト

オリビエ
ミュラー

エステル
ヨシュア
シェラザード
クローゼ(クローディア姫)
カシウス
アリシア女王
ゼクス中将
レクター

オズボーン宰相
ノーマン
ポルトス主任
男A
男B
男C
男D
ヒルダ夫人
船内放送(女)
定期船の客A
定期船の客B
定期船の客C

オリビエ「ドラマCD 空の軌跡。(タイトル未定)」

○オリビエの自室

扉を開けてミュラーが入ってくる。

ミュラー「なんだオリビエ、急に呼びだして」

オリビエ「あぁ、ミュラー! 君に聞かせたい詩があるんだ。ぜひ聴いてくれたまえ!」

ミュラー「……失礼する」

オリビエ「もう、つれないなぁ。別にお金を取ろうってわけじゃないんだし、少しぐらい」

ミュラー「時間のムダだ」

オリビエ「ヒドい! 親友が丹精込めて、夜も寝ずに書き上げた一大叙事詩を!」

ミュラー「ほう、夜も寝ずにな。なら、先日頼んでおいた各諸侯にあてて送る手紙の草案も書き上げたんだな?」

オリビエ「えっ? そ、それは……」

ミュラー「おい!」

オリビエ「な～んて。ほら、それは書いておいたよ」

紙をペラペラさせる音。

ミュラー「まったく……」

オリビエ「そんなことよりも～、聞いておくれよぉ、僕の華麗なる叙事詩を!」

ミュラー「叙事詩? 珍しいな、お前は愚にも付かない

叙情詩が得意だと思っていたが」

オリビエ「相変わらず手厳しいな君は。だが、今回は違うぞ！　ひとりの若く才能にあふれる美貌の詩人が、諸国を漫遊しつつ、様々な英雄たちに出会い、世界の敵と渡り合うストーリーさっ！」

ミュラー「……失礼する」

オリビエ「待ちたまえ！　このあらすじのどこが気にくわないんだい!?　すっごく面白くなりそうじゃないか！」

ミュラー「全部が気に食わん！　特に、詩人が主人公なところが！」

オリビエ「安心したまえ、詩人を助ける偏屈で頑迷な友人もちゃんと出てくるから」

ミュラー「ほう、そんな登場人物のモデルとされたやつは、さぞかし怒るだろうな……」

オリビエ「ミュラー君、顔、笑ってないよ」

ミュラー「はぁ……もういい。聞かないかぎり俺を部屋から出さないつもりだろう。とっとと話して終わらせろ」

オリビエ「さっすが、わかってるねぇ。では、まず最初は、詩人が若き遊撃士たちと出会うところから！」

○ハーケン門・休憩所・室内（回想）

休憩室にいるエステルたちとオリビエ。会話の最中、エステルたちの身分をズバリ言い当てるオリビエ。

オリビエ「君たち……ずばり、遊撃士だろう？」

イスを勢いよく引いて立ち上がる音。

エステル「ど、どうして……遊撃士の紋章は外してるのに！　もしかして、あんたも同業者？」

オリビエ「確かに帝国にもギルドはあるが、生憎ボクは遊撃士ではない。遊撃士の知り合いと同じ匂いがしたから、もしやと思ってね」

ヨシュア「大した観察力ですね……とても素人とは思えない。本当にただの旅行者ですか？」

オリビエ「フフ、そんな風に睨まないでくれたまえ。冷たく煌めく琥珀の瞳……まるで極上のブランデーのようだ。思わず抱き締めて、キスしたくなってしまうよ」

ヨシュア「なッ……!?」

シェラザード「ま、大胆」

エステル「ちょ、ちょっとぉ！　あんたそーいう趣味のヒト!?」

オリビエ「フッ……美しいモノに目がないだけさ。玲瓏たる美女。水もしたたる美少年。天上の調べ、心洗われる風景。匠の傑作、魂震わせる物語。そして極上の酒と料理……そうしたもの全てが、ボクの興味の対象たりえるのさ」

エステル「単なる節操ナシじゃない！」

シェラザード「呆れ果てた快楽主義者ね」

オリビエ「ハア、いつの時代でも天才は理解されないものだね。ガラスのように繊細なボクのピュアなハートはブロークンだよ。そこな美少年、どうかボクを慰めてくれたまえ」

ヨシュア「謹んでお断りします」

○オリビエの自室

オリビエ「いやぁ～、あの頃からヨシュア君は本当にかわいかったなぁ」

ミュラー「はぁ……」

オリビエ「おや、いきなりぐったりして、どうかしたのかい？」

ミュラー「お前のバカさ加減を思い出してな」

オリビエ「はて、君を失望させるようなことを、僕はしたかな？」

ミュラー「食い逃げしようとして牢屋に入れられただろうが！」

○牢屋（回想）

エステルたち、牢屋に連行されると、そこには先客としてオリビエがいた。

オリビエ「ああ、こんなところで再会することができるとは……。やはりボクとキミたちは運命で結ばれているらしいね」

エステル「あ、あんた……どうしてここにいるのよ？」

シェラザード「こんな牢屋に閉じ込められてるなんて……。一体、何をしでかしたわけ？」

オリビエ「まーまー、そう一度に質問しないでくれたまえよ。これには海よりも深く山よりも高い事情があるのさ」

エステル「あっそ、だったら聞かない。聞いちゃったら、ものすごく疲れそうな気がするし」

ヨシュア　「偶然だね、エステル……僕もそんな予感がするんだ」

シェラザード　「そういうわけで、話してくれなくても結構よ。あたしたちの健康と美容のために」

オリビエ　「はっはっはっ。そんなに遠慮することはない。一部始終聞いてもらうよ。ボクの身に起きた悲劇的事件をね」

オリビエ　「君たちと別れた後、僕はレストランに入ったんだ。そこで存分に舌鼓を打ち、余興にグランドピアノを弾いたのさ。すると、レストランの支配人が身を震わさんばかりに感激してね……。ピアニストとして雇いたいと頼み込んで来たわけだよ」

エステル　「どうでもいいけど……あんたリュート弾きじゃないの?」

オリビエ　「フッ、天才というのは得物を選ばないものだよ。それはともかく……ボクはある条件を出してそのオファーを受けたわけだ。給料の代わりに、料理とワインを毎日タダでご馳走してくれってね」

ヨシュア　「何て言うか……オリビエさんらしいですね。でも、それがどうして、こんな牢屋に入れられることに?」

オリビエ　「ああ、ここからが聞くも涙、語るも涙の話なのさ。その夜、さっそくボクはシェフに作らせた鴨肉のソテーに舌鼓を打っていたのだが……血を使ったソースがまた、たまらなく濃厚な味わいでねぇ。どうしても普通の赤ワインでは物足りなく感じてしまったのだよ」

エステル　「それで、あんたはどうしたの?」

オリビエ　「貯蔵庫の奥に保存されていた、良さそうな一本を拝借したんだ。《グラン＝シャリネ》1183年物」

シェラザード　「《グラン＝シャリネ》、しかも1183年物ですって!? 王都のオークションに出た、幻のヴィンテージワインじゃない!」

オリビエ　「ほう、シェラ君はなかなか詳しいね。ボクも噂を聞いて、かねてから飲んでみたいと思っていたのさ」

エステル　「オ、オークションって……どのくらいの値段がついたの?」

シェラザード　「聞いた話じゃ、50万ミラで落札されたそうよ」

エステル　「ご、50万ミラ～!? たかがワイン1本に!?」

ヨシュア　「とんでもない世界だね……。オリビエさん、まさかそのワインを……」

オリビエ　「フッ、言うまでもない。美味しく頂かせてもらったよ。鼻腔をくすぐる馥郁（ふくいく）たる香り。喉元を愛撫する芳醇（ほうじゅん）な味わい。ねえキミたち、信じられるかい? 薔薇色に輝く時間と空間が確かにそこには存在したんだ……」

エステル　「ダメだこりゃ……」

ヨシュア　「やっぱり疲れたね……」

シェラザード　「呆れてモノも言えない……」

オリビエ　「しかし、そうなると今度は料理の方が物足りなく感じてねぇ。ワインに合うくらいの逸品をシェフに作らせようとした時に、ちょうど支配人が帰ってきたんだ。ボクもケチじゃないからね。彼にも飲んでもらおうと、気前よくグラスを勧めたんだが……。なぜか激しく立腹し始めてねぇ。あれよ、あれよという間に兵士たちがやって来たのだよ」

○オリビエの自室

オリビエ　「あぁ、あのワインは最高だったね。あのような逸品に、また出会いたいものだ」

ミュラー　「構わんが、今度飲むときは自分のサイフでなんとかしろ。あの店の支配人、ショックのあまり死人のような顔をしてたらしいぞ」

オリビエ　「不思議な話だねぇ。仕入れているということは、誰かに売るつもりだったわけだろう? それがたまたま僕だっただけじゃないか」

ミュラー　「お前が50万ミラを払えば、何の問題もなかったんだがな」

オリビエ　「ハッハッハ!」

ミュラー　「笑い事じゃない! だいたい、お前をリベール王国にやったのは、旨いものを飲み食いさせるためじゃないんだぞ!」

オリビエ　「あれ、そうだっけ?」

ミュラー　「貴様……!」

オリビエ　「いやだなぁ、冗談冗談」

ミュラー　「しかも、正体が早々にバレそうになるし……」

○宿屋・室内

オリビエ　「そちらの方は引き続き頼む。くれぐれも宰相

殿に気付かれるな」

ミュラー「（通信機を通しての声）ああ、了解だ」

オリビエ「また連絡するよ……親友」

シェラザード「……携帯用の小型通信器ね。ずいぶん洒落たものを持ち歩いているじゃないの」

コツコツと歩いてくる足音。

オリビエ「シェ、シェラ君……」

シェラザード「ツァイスの中央工房ですら実用化してないオーブメントを持っているなんてね……。あんた、いったい何者なの？」

オリビエ「フッ、水くさいことを言わないでくれたまえ。漂泊の詩人にして天才演奏家、オリビエ・レンハイムのことは、キミも良く知っているはずだろう？ だが、もっと知りたいのであれば所謂ピロートークというやつで……」

シェラザード「悪いけどマジなの。道化ゴッコは通用しないわよ。エレボニア帝国の諜報員さん」

オリビエ「フフ、《銀閃》の名は、どうやらダテじゃなさそうだね」

シェラザード「それじゃ、詳しいことをサクサク喋って貰おうかしら。あんたの目的は？ どうしてリベールに潜入したの？」

オリビエ「その前に……2つほど訂正させてくれるかな。まず、道化ゴッコはしていない。ボクの場合、これが地の性格でね。擬態でも何でもなかったりする」

シェラザード「あー、そうでしょうとも。ワインをタダ飲みしたのだって、飲みたいからやったんでしょうよ。ただしその後、門に連行されて情報を集めることまで計算してね。あたしたちと合流する事まで狙っていたとは思えないけど……」

オリビエ「フフフ……そのあたりは想像にお任せするよ。訂正するのはもう1つ……この装置はオーブメントじゃない。帝国で出土したアーティファクトさ。あらゆる導力通信器と交信が可能で、暗号化も可能だから傍受の心配もない。忙しい身には何かと重宝するのだよ」

シェラザード「アーティファクト……七耀教会が管理している聖遺物か。ますますもって、あんたの狙いが知りたくなってきたわね」

オリビエ「イヤン、バカン。シェラ君のエッチ。ミステリアスな美人の謎は無闇に詮索するもんじゃなくてよ」

シェラザード「本物の女に近づきたい？ あたしの鞭で手伝ってあげるけど」

オリビエ「や、やだなあシェラ君。目が笑ってないんですけど……。まあ冗談は置いとくとして。お察しの通り、ボクの立場は帝国の諜報員のようなものさ。だが、工作を仕掛けたり極秘情報を盗むつもりはない。ある人物に会いに来ただけなんだ」

シェラザード「ある人物……？」

オリビエ「キミも良く知っている人物だよ。王国軍にその人ありと謳われた最高の剣士にして、稀代の戦略家。大陸に5人といないS級遊撃士。《剣聖》カシウス・ブライトその人さ」

○オリビエの自室

ミュラー「まったく……」

オリビエ「ま、いいじゃないか。結局、彼らと行動を共にすることで、カシウス殿とは会えたわけだし。とはいえ、ここまで長いつきあいになるとはねぇ」

ミュラー「で、カシウス殿に会えたというのに、お前は相変わらずプラプラとしてるばかりだったな」

オリビエ「プラプラとは失礼な。人々に愛を広める僕の大活躍、聞かせてあげよう！ あれはそう、つまらない諍い事を人々が繰り広げている時だった！」

○街中

往来の多い大通り。二組の男たちが諍いあっている。それをまわりの野次馬たちがはやし立てている。

男A「もう我慢できねぇ！」

男B「てめえらみてぇな軟弱野郎が腕っぷしで勝てると思うなよ！」

男C「じょ、上等だ！ やってやろうじゃないか！」

男D「ノーマンさんの名誉は、僕たちノーマン商会員が守る！」

ノーマン「止めたまえ君たち！ 暴力はいかん、暴力は！」

ポルトス主任「みんな抑えてくれ！ ここは冷静に話し合いを……」

エステル 「やばっ……!」

シェラザード 「これは止められないわね……」

ポロローン♪とリュートのSEが聞こえてくる。

小舟の上に乗ってオリビエ登場。

オリビエ 「フッ……哀しいことだね」

エステル 「この声は、オリビエ……ってぇ!?」

シェラザード 「小舟の上に乗って登場とは……相変わらず芝居がかってるわね」

オリビエ 「争いは何も生み出さない……虚しい亀裂を生み出すだけさ。そんな君たちに、歌を贈ろう。心の断絶を乗り越えて、お互いに手を取り合えるような、そんな優しくも切ない歌を……」

オリビエ 「陽の光 映す 虹の橋。掛け渡り 君の元へ……。求めれば 空に 溶け消えて。寂しいと 風が舞う……。届くことなどない はかない願いなら。せめてひとつ 傷を残そう……。はじめての約束 守らない約束……。君の吐息 琥珀にして。永遠の夢 閉じ込めよう……」

キラキラ～としたSE。

オリビエ 「フッ……みんな感じてくれたようだね。ただ一つの真実……それは愛は永遠ということを。今風に言えば、『ラブ・イズ・エターナル』」

一同 「…………」

ノーマン 「コ、コホン……。とりあえず、ここはいったんお互い、頭を冷やした方が良さそうだな」

ポルトス主任 「ええ、そうですね。通行の邪魔にもなりますし。みんな、いったん港の方に戻ろう」

男A 「そ、そうっすね……」

男C 「そうだ……チラシを配らなくちゃ」

人々、去っていく。

エステル 「み、みんな逃げた……」

シェラザード 「はあ……またこのパターンか」

オリビエ 「フッ、どこの国でも民衆が熱しやすく冷めやすいのは同じだな。いや、真に恐るべきはみんなの平常心を取り戻したこの奇跡のごとき旋律か……」

○オリビエの自宅

ミュラー 「……そんなことをやってたのか。まったく、とんだ恥さらしだ……帝国の名をどこまでおとしめるつもりだ?」

オリビエ 「まあまあ。ヨシュア君がいなくなって、落ち込むエステル君を励ませたから、よしとしてくれたまえ」

ミュラー 「ヨシュア……《ハーメルの悲劇》の生き残りにして、結社の元エージェント、か」

オリビエ 「君は確か、彼と一度やりあったはずだね」

ミュラー 「空賊一家の船を盗みに来た時に、鉢合わせしてな。あの時無線でも話したが、正直あまり再戦したくない相手だ」

オリビエ 「無線……あぁ、あの時か」

○宿屋・室内

ミュラーの声は、通信機を通したものです。

ミュラー 「というわけで、奴は空賊たちと共に、船を奪って逃げた。それと、新聞社の連中がうろついていたが、俺たちの写真は撮られていない」

オリビエ 「ふむ……なるほどね」

ミュラー 「どうした?」

オリビエ 「いや、実は記者の諸君がエステル君を訪ねて来たのさ。その後、彼女の様子が変だったから何の話だと思ったんだが……フッ、やっと疑問が氷解したよ。彼が、写真に写っていたんだね」

ミュラー 「お前の読み通り、あのヨシュアという少年は、《結社》の《執行者》。《漆黒の牙》だったわけだが……このことは、黙っておけばいいんだな」

オリビエ 「ああ、それでOKだ。王国軍に報告することはない。どうせ彼あたりは全部、予測していただろうからね」

ミュラー 「だが、正直驚いたぞ。はじめ聞いた時は、何かの冗談かと思ったが」

オリビエ 「ハッハッハッ。ボクの読みも大したものだろう? いや、実はかなり適当だったんだがまさかにひょうたんから駒だったみたいだね」

ミュラー 「ひょうたんから駒、だと……!? 貴様、そんな曖昧な情報で、俺たちを動かしたのか!?」

オリビエ 「わかった、わかった。そう恐い声を出すものじゃない。いずれにせよ、例の準備は帝都に帰還しだい始めてくれ」

ミュラー「了解だ」

オリビエ「ああ……できれば、あの人を割り込ませる方向で。よろしく頼むよ、親友」

オリビエ、通信器のスイッチを切って懐にしまう。

オリビエ「ふむ、まさかミュラーと互角に渡り合えるとはね……。さすが《結社》の元エージェントといった所か。しかし、ボクの読みが当たっていたということは……」

エステル「何が当たってたの？」

オリビエ「エ、エステル君!?」

エステル「なによ、こんな所でヒソヒソ話なんかして……って、あれ？　誰もいないじゃない。オリビエ、誰と話してたの？」

オリビエ「フッ、何のことだい？　このボクが、キミ以外の女性とこんな所で密会をするとでも？」

エステル「おかしいわね……あんたが誰かと話していたのが聞こえてたんだけど……」

オリビエ「はっはっはっ、参ったな。独り言を聞かれてしまったか」

エステル「独り言？」

オリビエ「独り言というのはちょっと語弊があるかな……その昔、ボクが主役を演じた舞台の台詞を口にしていたのさ」

エステル「そうだったんだ。――とか納得すると思う？」

オリビエ「ギク」

エステル「ど～もオリビエってイマイチ信用できないのよね。前にも父さんとコソコソ、何か話し合ってたみたいだし。そろそろ本当の目的を教えてくれてもいいんじゃない？」

オリビエ「ん～、まさかキミからそんな風に突っ込まれるとは。成長したねぇ、エステル君」

○オリビエの自室

オリビエ「いやぁ、本当にエステル君の成長はめざましいものがあったよ」

ミュラー「そしてお前は、まったくと言っていいほど成長してないがな。シェラザードに続いて、エステルにも聞かれるとは」

オリビエ「あははははは」

ミュラー「笑い事じゃない！　もう少し慎重に行動しろ」

オリビエ「まあまあ。あの時はなんとかごまかしたんだ

から、結果オーライということで」

ミュラー「まったく……。それにしても、元結社のエージェントで、一度は目の前から立ち去ったヨシュアを、よく連れ戻せたものだ」

オリビエ「それはやはり……愛の力だよ、うん！　君もそう思うだろう!?」

ミュラー「そうこうしているうちに、ついに宰相殿が動いてしまったわけだな」

オリビエ「ちょっとミュラー君!?　僕の話は完ぺきに無視ですか!?」

ミュラー「リベール王都グランセル上空に謎の浮遊都市が出現。帝国はこれをリベールが開発した新兵器と断定し、国境近くに軍を送り込んだ。しかも、導力停止現象の中でも動く、蒸気機関の戦車を投入。……まるで、最初から準備していたかのようにな。鉄血宰相オズボーン。底の知れぬお方だ」

オリビエ「僕の話を少しぐらい聞いてくれても……ブツブツ」

ミュラー「この少し前にお前は姿を消し、再び現れた。彼らがもっとも驚くタイミングでな。まったく……」

オリビエ「いいじゃないか。そのほうが楽しいし♪」

○ハーケン門近くの荒れ地

戦車部隊を前にして、帝国側と交渉（戦車部隊を引き上げて欲しい）をしているクローゼやエステルたち。

クローゼ「目下、わたくしたちはこの異常現象を解決する方法を最優先で模索しております。また例の犯罪組織についても、自力で対処出来ている状況です。不戦条約によって培われた友情に無用な亀裂を入れないためにも……どうか、わたくしたちにしばしの時間を頂けないでしょうか？
　ゼクス中将」

ゼクス「むむ……」

オリビエ「（遠くから声をかける）残念だが、それはそちらの事情でしかない」

オリビエが歩いてくる足音。

エステル「へっ……？」

シェラザード「まさか……！」

ゼクス　「皇子……」

オリヴァルト　「ここは私が引き受けよう。下がっていたまえ、中将」

ゼクス　「は……」

オリヴァルト　「お初にお目にかかる。クローディア姫殿下。エレボニア皇帝ユーゲントが第一子、オリヴァルト・ライゼ・アルノールという」

エステルとシェラ、小声でひそひそと。

エステル　「皇帝の第一子って……お、皇子様ってこと～!?　シェラ姉、知ってたの!?」

シェラザード　「知るわけないじゃない！　てっきり帝国から派遣された諜報員だと思ってたわよ」

クローゼ　「オリヴァルト皇子……名前だけは存じていましたが」

オリヴァルト　「フフ、第一子とはいっても、しがなき庶子でしかないのでね。公式の場に出ることも少ないから、顔を知らなくても不思議はない。しかし、そうは言っても少しばかりショックではあるな。縁が無かったとはいえ、かつての縁談相手の顔くらいご存じかと思ったのだがね」

エステル　「(ひそひそ) あ、あんですって～!?」

クローゼ　「そうでしたか……存じなかった事とはいえ、本当に申しわけありません」

オリヴァルト　「まあ、女王陛下の与かり知らぬ所で進められていた話だとは聞いている。その事は別に気にしていない。だが……今回の事態は見過ごせないな」

クローゼ　「………」

オリビエ　「クローディア姫。今、帝国本土でどのような噂が囁かれているかご存じかな？　彼方に見えるあの巨大な物体……あれが王国軍の新兵器という噂だ」

クローゼ　「えっ!?」

オリビエ　「『リベール軍が導力を停めてしまう画期的な新兵器を実用化したそうだ。彼らはそれを使って10年前の復讐を企てているらしい』――こんな噂が、まことしやかに流れているのだよ」

クローゼ　「そ、そんな誤解です！　わたくしたちはそんな……」

オリビエ　「ならば……誤解である事を証明できるかね？」

クローゼ　「っ……」

オリビエ　「出来ないのであれば、こちらもそれなりの対応をさせてもらうしかないわけだ。それ所か、噂の通りならば不戦条約を隠れ蓑にした重大な背信とすら言えるだろう。フフ……正当防衛も止むをえないと思わないかね？」

エステル　「いい加減にしなさいよ！」

ヨシュア　「エステル……！」

エステル　「さっきから聞いていれば勝手なことをペラペラと！　オリビエだってこっちの事情は大体、分かってるんでしょ!?　どうしてそんな意地悪なことばかり言うわけ!?」

クローゼ　「エ、エステルさん……」

オリビエ　「おや……何だね君は？　私の事を知っているようだが、どこかのパーティで会ったかな？」

エステル　「へっ……」

オリビエ　「いや、貴族にしてはいささか品位に欠けるな……。ふむ、どこからどう見ても庶民の娘でしかなさそうだ。で、何者なのだね？」

エステル　「……上等じゃない。あくまでシラを切るわけね。そっちがそのつもりなら、あたしだって考えがあるわよ？」

オリビエ　「ほう……？」

エステル　「あたしの名前は、エステル・ブライト！　リベール遊撃士協会に所属する正遊撃士よ！　あくまで中立の立場から、この問題に介入させてもらうわ！」

クローゼ　「エステルさん……」

オリビエ　「ふむ、遊撃士だったのか。中立の立場からというが、この状況で何をするつもりかね？」

エステル　「あの浮遊都市がリベールの兵器じゃないことを、ここではっきりと宣言するわ！　『支える籠手』の紋章に賭けて！」

オリビエ　「ほう……大きく出たものだ。確かに遊撃士協会の発言には無視できぬ影響力があるが……。果たしてその宣言にどれだけの根拠があるのかね？」

エステル　「根拠も何も、あたし達がこの目で見てきたことだもの。浮遊都市を出現させたのは今もリベールで暗躍している《身喰らう蛇》という結社よ。あたし達は、王国軍と協力して、彼らの陰謀を止めるため戦ってきた。何だったら、詳細な報告書を帝国政府に提出したっていいわ」

オリビエ　「ふむ。そのように言われては少々考えざるをえないが……どうやら肝心なことが抜け落ちているのではないかな？」

エステル　「え……」

オリビエ　「仮のその結社とやらが犯人であったとして……。この異常現象を止める方法が果たして君たちにあるのかね？」

エステル　「そ、それは……」

オリビエ　「無いのであれば、我々としても手をこまねいているつもりはない。幸い、蒸気戦車に搭載しているのは火薬式の大砲でね。あの浮遊都市を落とすにはもってこいだとは思わないかね？」

エステル　「じょ、冗談でしょ⁉　大砲なんかで、あの巨大な都市を落とせるはずないじゃない！」

オリビエ　「フフ、やってみなくては分かるまい。いずれにせよ、ひとつ確実に言える事がある。君たちには、我々の善意と正義を退けるだけの根拠も実力もないということだ」

エステル　「くっ……」

クローゼ　「ならば……証明すれば宜しいのですね？」

オリビエ　「ほう……？」

クローゼ　「この状況にあって、あの浮遊都市を何とかする可能性を提示できれば……。わたくしたちに、しばしの猶予を頂けるのですね？」

オリビエ　「ふむ、そうですな……。一時的ではあるが、そうせざるを得ないだろう」

ゼクス　「お、皇子……⁉」

オリビエ　「落ち着け、中将。不戦条約を結んだ相手に当然の礼儀というものだろう。それに証明できれば、だ」

ゼクス　「……は」

オリビエ　「それでは、君たちが可能性を提示できたら一時的に撤退することを約束しよう。『黄金の軍馬』の紋章と皇族たる私の名に賭けてね」

遠くから、朗々と響く声。

カシウス　「その言葉、しかと聞きましたぞ」

エステル　「い、今の声は……！」

ヨシュア　「……父さん」

アルセイユの着陸音。

ゼクス　「ふ、ふ、船が……！」

エステル　「あれって、アルセイユ⁉」

ヨシュア　「父さんも、思い切ったことをするね」

カシウス　「これが現時点で我々が提示できる可能性です。どうぞじっくりとご覧あれ」

ゼクス　「カ、カシウス・ブライト⁉」

カシウス　「ゼクス少将、久しぶりですな。おっと……今では中将でしたか？」

ゼクス　「そんな事はどうでもいい！　ど、どうしてこんな所に……。いや、それよりもその船は何なのだ⁉　どうしてこの状況で空を飛ぶことができる⁉」

カシウス　「それは国家機密と申し上げておきましょう。貴国がどうして蒸気戦車を保有しているのかと同じようにね」

ゼクス　「ぐっ……」

※オリビエとカシウス、実際にはあったことがあります。あくまでお芝居です。

オリビエ　「ふむ……これが噂の《アルセイユ》か。そして貴公が、かの有名な、カシウス・ブライト准将なのか？」

カシウス　「お初にお目にかかります、殿下。何やらどこかでお会いした事があるような気もいたしますが……」

オリビエ　「奇遇だな、准将。私もちょうど同じ事を感じていた所でね」

カシウス　「それはそれは……」

オリビエ　「まったく……」

カシウス&オリビエ　「ハッハッハッハッハッハッ」

ゼクス　「お、皇子！」

オリビエ　「クローディア姫、エステル君。私も誇り高きエレボニア皇族だ。先ほどの約束は守らせてもらおう。すぐにでも、この付近から帝国軍の全部隊を撤退させる」

エステル　「オリビエ……」

クローゼ　「……感謝いたします」

オリビエ　「しかし、そうだな……可能性を示されただけでは、わが帝国市民も納得すまい。ここは一つ、私自身がアルセイユに乗せてもらって、視察するというのはどうだろう？」

ゼクス　「お、皇子ッ⁉」

カシウス　「ふむ、皇子自らの視察とあらば帝国政府も納得しましょう。如何です、クローディア殿下？」

クローゼ　「勿論、願ってもない事です。リベールとエレボニアの友情も、さらに固く結ばれる事でしょう。歓迎いたします。オリヴァルト皇子殿下」

○オリビエの自室

ミュラー「ハデ好きなお前らしい、芝居がかった登場の仕方だ」

オリビエ「いやいや、あれはカシウス殿がすべておいしいところを持って行ってしまった。役者として、彼の方が一枚上手だよ」

ミュラー「何を楽しそうに……はぁ、叔父上の心労はますばかりだな」

○ハーケン門近くの荒れ地

ゼクス「皇子！　一体どういうおつもりか！　久々に顔をお見せになったかと思えば、こ、このような猿芝居を……！」

オリビエ「ハッハッハッ。やっぱりバレちゃった？」

ゼクス「当たり前ですッ！　よもや皇子がリベールで、このような事を企んでいたとは……。ミュラー！　お前が付いていながら何事だ！」

ミュラー「お言葉ですが叔父上。この男が、俺の言うことなど素直に聞くとお思いですか？」

ゼクス「ぐっ……」

ミュラー「それに俺も少々、納得が出来ないこともある。『ハーメルの悲劇』……今度の一件で初めて知りましたよ」

ゼクス「！？！」

ミュラー「……やはりご存じでしたか」

オリビエ「ハハ、先生があの事件を知らないはずがないだろう？　当時からすでに軍の重鎮だったのだからね」

ゼクス「………」

オリビエ「いやいや、先生。あなたを責めるつもりはないよ。一部の主戦派が企てただけで、先生たちは一切関与していなかったという話だからねぇ」

オリビエ、ゼクスから視線を外して瞑目する。

オリビエ「王国軍に偽装させた帝国の兵士に、国境付近の村を襲わせ、戦争の口火を切る口実とした《ハーメルの悲劇》。あまりに酷いスキャンダルゆえ、徹底的に行われた情報規制……賛成はしかねるが、納得は出来る。臭い物にはフタを、女神には祈りを。若者には国家の正義をと言うわけだ。だが……」

オリビエ、ここでゼクスの方に振り返る。

オリビエ「――同じような欺瞞を繰り返すことは許さない」

ゼクス「ッ……」

オリビエ「先生、あなたも本当は気付いているはずだ。唐突すぎる蒸気戦車の導入。そして不自然極まるタイミングでの出動命令……全ては《鉄血宰相》ギリアス・オズボーンの描いた絵であることを」

ゼクス「！」

オリビエ「今回の事で確信したよ。彼は間違いなく《身喰らう蛇》と通じている。その事が、帝国にとってどのような影響をもたらすかは何とも言えないが……。いずれにせよ、一国の宰相にふさわしい振る舞いではあるまい？」

ゼクス「皇子、まさか貴方は……」

オリビエ「フフ、そのまさかだ。10年前に頭角を現して帝国政府の中心人物となった軍部出身の政治家。帝国全土に鉄道網を敷き、幾つもの自治州を武力併合した冷血にして大胆不敵な改革者。帝国に巣喰うあの怪物をボクは退治することに決めた。今度の一件はその宣戦布告というわけだ」

ゼクス「何ということを……皇子、それがどれほど困難を伴うことであるのか、理解しておいでなのか？」

オリビエ「そりゃあ勿論。政府は勿論、軍の7割が彼の傘下にあると言っていい。先生みたいな中立派を除けば、反対勢力は衰え始めた諸侯のみ。さらにタチが悪いことに父上の信頼も篤いと来ている。まさに怪物というべき人物さ」

ゼクス「ならばなぜ……！」

オリビエ「フッ、決まっている。彼のやり方が美しくないからさ」

ゼクス「!?」

オリビエ「リベールを旅していて、ボクはその確信を強くした。人は、国は、その気になればいくらでも誇り高くあれる。そしてボクの祖国と同胞にも、同じように誇り高くあって欲しい。できれば先生にも、その理想に協力して欲しいんだ」

ゼクス「…………。皇子、大きくなられましたな」

オリビエ「フッ、男子三日会わざれば刮目して見よとも言うからね。ましてや先生に武術と軍事学を教わっていた時から5年が過ぎた。少しは成長したと言うことさ」

ゼクス「フフ……そうですな」

ゼクス、態度を切り替えて。

ゼクス「撤退に関しては了解しました。ただし、我が第3師団はあくまで先駆けでしかありませぬ。すでに帝都では、宰相殿によって10個師団が集結しつつあります」

オリビエ「ああ、心得た」

ゼクス「ミュラー。お前も皇子に付いてゆけ。危なくなったら首根っこを掴んででも連れて帰るのだぞ」

ミュラー「ええ、元よりそのつもりです」

○オリビエの自室

オリビエ「先生には、これからもご心労をおかけしてしまうことになるね、こりゃ」

ミュラー「叔父上も、教えるべき生徒を間違えたといったところか」

オリビエ「おやおや、ずいぶんと自分のことを卑下するんだね、君は」

ミュラー「お・ま・え・の・こ・と・だ。ともかく、一連の《異変》騒ぎは収まったが、俺たちにとってはその後の方が大変だったな」

オリビエ「帝国に帰ろうと、アリシア女王にご挨拶をしていたら、とんでもない客人がやってきたしねぇ」

○グランセル城・謁見の間

オリビエ「――女王陛下、王太女殿下。今まで本当にお世話になりました。その上《アルセイユ》で帝都まで送って欲しいという図々しい願いを叶えて頂けるとは……。このご恩、いつか必ずや、何倍にもしてお返しいたします」

アリシア女王「ふふ、とんでもありません。殿下のような国賓を《アルセイユ》でお送りするのはしごく当然の事でありましょう。こちらこそ、殿下には色々とお世話になってしまいましたね」

クローゼ「また、機会があったら是非、リベールにいらして下さい。その頃にはエステルさんたちも戻ってきているでしょうし。皆で盛大に歓迎させていただきますから」

オリビエ「はは、楽しみにさせてもらうよ。そういえば、エステル君たちも、そろそろリベールを発った頃かな?」

カシウス「いや、今頃ロレントで旅立ちの支度をしている頃でしょう。自分もその時には休暇を頂いて2人を見送ろうかと思っています」

オリビエ「なるほど……。ハーメル跡は封鎖されているが、私の方で責任をもって入れるよう取り計らっておこう。2人に宜しく伝えて欲しい」

カシウス「承知しました。皇子殿下、感謝いたします」

オリビエ「なに、あの2人にしてもらった事を考えれば、それくらい些細なことだよ。カシウスさんにも本当に色々とお世話になった。貴方の協力がなかったら、ああも上手く帝国軍の師団を足止めできなかっただろう」

カシウス「フフ……それはこちらの台詞ですよ。それに、もうお気づきかとは思いますが、あの展開も想定の範囲内でしょう。かの《鉄血宰相》殿にとっては」

オリビエ「…………」

クローゼ「えっ……」

アリシア女王「そうでしょうね。実際、あの状況でリベールを制圧するメリットは、エレボニアにはありませんでした。それも効率が悪いとされる蒸気戦車などを開発してまで。唯一、あるとすれば……」

オリビエ「導力停止現象中も、帝国軍が行動できるという事を諸外国に知らしめること。おそらくそれが真の狙いの筈」

クローゼ「あ……！」

カシウス「その通り……よくお気づきになった。『導力停止現象』というものは諸外国にとっては未知の現象です。今後、同じ事が他の場所で起きるかもしれないし、二度と起きないかもしれない」

ミュラー「実際、製造された蒸気戦車は少数だったそうです。ラインフォルト社の工房で通常の導力戦車の部品を流用して組み上げられたとか」

オリビエ「つまりそのノウハウは現状では帝国にしか存在しない。そしてこの不透明な状況で蒸気を

使った効率の悪い兵器など導入できる余裕はどの国にもない。――結果的に、帝国軍の潜在的な示威・抑止能力はさらに高まることになる……。まさに戦争を外交の道具としてコントロールしているわけだね」

クローゼ「そんな事情があったなんて……やはりわたくしは、まだまだ至りませんね」

オリビエ「この場合は、かの宰相殿が尋常ではないと言うべきだろう。その発想は、良し悪しは別にして、時代の一歩も二歩も先を行っている。フッ、そんな厄介な相手に挑戦状を叩き付けてしまうとは、我ながら無謀もいいところさ」

クローゼ「殿下……」

ミュラー「まったく……何を他人事のように」

アリシア女王「今はご自分の足場を固めることに専念すべきでしょう。ですが、どうかお気を付けて。ご自分の立ち位置だけは決して見失われないでください」

オリビエ「……判りました。これで無様を晒すことになれば、わざわざ《アルセイユ》で帝都まで送っていただく甲斐がないというもの。今のお言葉、肝に銘じておきます」

扉を開けて、ヒルダ夫人が息せき切って駆け込んでくる。

ヒルダ夫人「し、失礼します……！」

クローゼ「ヒルダさん……？」

アリシア女王「女官長、いかがしました？　貴女がそのように取り乱すのは珍しいですね」

ヒルダ夫人「……失礼しました。今しがた、グランセル城に突然のご来客がございまして。それが余りに異例だったのでお話中、失礼かとは思ったのですが、陛下たちのお耳に入れようかと……」

アリシア女王「異例の来客……」

オリビエ「ふむ、そろそろ私は、お暇（いとま）した方が良さそうだ」

ヒルダ夫人「いえ、それが……。その方は陛下だけでなく、皇子殿下にもご挨拶したいと仰っておりまして」

ミュラー「なに……!?」

オリビエ「………。ヒルダ夫人、その客人の名前は？」

ヒルダ夫人「はい。エレボニア帝国宰相、ギリアス・オズボーンと名乗っていらっしゃいます」

×　×　×

オズボーン「――お初にお目にかかります。エレボニア帝国政府代表、ギリアス・オズボーンと申します。このような形での突然の訪問、どうかお許しいただきたい」

アリシア女王「あなたが……」

クローゼ「（驚き）………」

オズボーン「そして我が親愛なるオリヴァルト皇子殿下……ご無沙汰しております。1年ぶりくらいでありましょうか？」

オリビエ「ああ、そんな所かな。しかし宰相。どうも話が見えないんだが……。なぜ、一国の宰相たる貴方が何の前触れもなくこちらに？　しかるべき経緯を聞かせて頂きたいものだな」

オズボーン「これは失礼……。実は、先日より東部諸州の視察に出向いていたのですが、予想以上に順調に事が進みまして。いささか余裕が出来たので、こちらに参上した次第なのです」

オリビエ「それはそれは……」

オズボーン「本来ならば殿下のように、まさに『異変』の最中にでも駆けつけたかった所なのですが……。生憎、南部の混乱もひどく、その対応に追われておりまして。ようやく時間が取れたので思い余って参上させて頂きました。前触れなき無礼をお許しあれ」

オリビエ「……なるほど。そういう事情なら是非もない。私のことは気にせず、ご挨拶申し上げるといいだろう」

オズボーン「ありがとうございます。それでは……」

オズボーン、女王たちの前に進み出て一礼する。

オズボーン「改めまして。アリシア女王陛下、ならびにクローディア王太女殿下におかれましてはご機嫌麗しゅう。この度の異変、貴国にとっては大変な試練であったことでしょう。心からのお悔やみと……異変が無事終息したことのお祝いを、ここに述べさせていただきます」

クローゼ「あ……。丁寧なご挨拶、痛み入ります」

アリシア女王「こちらこそ、異変が貴国の南部にまで影響を及ぼしたこと、かねてより遺憾に思っておりました。なのに、わざわざ宰相閣下にご足労をおかけしてしまうとは……どうか心よりの感謝と

お詫びをお受け取りください」

オズボーン「なんの、聞けば異変の陰には得体の知れぬ組織が蠢いていたとか。そうとも知らず、ただ貴国の力になりたい一心で軍を動かしたのは、あまりに愚かで軽率でありました。さすがに皇帝陛下からも、お叱りの言葉を受けたくらいです」

アリシア女王「まあ……」

オズボーン「ですが、我が失態も、オリヴァルト殿下のはからいで何とか繕われたとのこと。殿下におかれましては、心よりの感謝を申し上げます。それと異変終息の見届け役、まことにお疲れさまでありました」

オリビエ「なに、大したことはやっていないさ。それに陛下や殿下、そしてこちらのカシウス准将にも、色々と助けていただいたからね」

オズボーン「ほう……」

カシウス「お初にお目にかかる。リベール王国軍所属准将、カシウス・ブライトと申します」

オズボーン「フフ、貴公の高名は我が帝国にも響き渡っている。こうしてお目にかかれて光栄だ」

オリビエ「ところで宰相。この後、どうするつもりかな？あいにく私は、今日をもってリベールを暇するつもりなのだが」

オズボーン「ええ、存じ上げております。何でも名高き《アルセイユ》にて帝都に凱旋なさるのだとか……」

オリビエ「ふむ……さすがに耳が早い」

オズボーン「私もご一緒させていただければ……と、お願いしたい所なのですが。あいにくこの後、他の予定が入っておりましてね。殿下とは別に、私も午後にはリベールを発たなくてはなりません」

アリシア女王「まあ……今宵の晩餐には是非とも招待させていただくつもりだったのですが」

オズボーン「ハハ、どうかお気遣いなく。不躾なる来訪者には過ぎた饗応（きょうおう）というものでしょう。ですが、船が来るまでいささか時間がある様子……。よろしかったら殿下。しばしお時間を頂けませんか？……個人的に色々と、お話ししたい事がありますゆえ」

ミュラー「っ……」

クローゼ「（不安）…………」

オリビエ「……そうだな、いいだろう。私も貴方と個人的に話がしたいと思っていた所でね」

オズボーン「フフ、それは偶然ですな」

アリシア女王「よろしければ部屋を用意させましょう。女官長、よろしくお願いします」

ヒルダ夫人「かしこまりました」

○グランセル城・別室

紅茶のカップをソーサーに置く音。

オズボーン「ふう。さすが女王陛下ご自身が紅茶がお好きなだけはありますな。香り、温度、味わい……どれをとっても申し分ない。フフ、私はコーヒー党ですが、これなら毎日飲みたいくらいです」

オリビエ「その意見には同意するが……そろそろ本題に入って頂こうか。話というのは一体何かな？」

オズボーン「フフ……どうやらリベールでの滞在は、殿下にとってこの上なく有意義なものだったようですな」

オリビエ「なに……」

オズボーン「以前お会いした時も、たいそう柔軟で聡明な方だという印象を受けたものですが……。今の殿下はそれに加えて芯の強さも兼ね備えておいでだ。さぞ陛下もお喜びになるでしょう」

オリビエ「フッ、そういう貴方こそ相変わらずの豪胆ぶりだね。いや、以前会った時よりもさらに圧倒的なオーラを感じるよ。さしずめ併呑（へいどん）した領土の広さだけの怨念をまとっているといった所かな」

オズボーン「フフ、これは手厳しい。ですが、できれば併呑ではなく併合と仰って欲しい所ですな。かの《百日戦役》以来、帝国軍が侵略行為に及んだことは、ただの一度たりとも無いのですから」

オリビエ「確かにその通りだ。——あくまで名目上はね」

オズボーン「……ほう」

オリビエ「併呑された小国や自治州は、どこも幾つかの問題を抱えていた。そして、その問題が深刻化し、猟兵団などが入り込んできた所で極度に治安が悪化……。困窮した現地政府の要請を受けて帝国軍が介入し、そのまま有耶無耶の流れで併合が決定される。そのプロセスは全て共通している」

オズボーン「ふむ、確かにそのような共通性があるのは確かですな。ですがそれも、激動の時代が生み出した必然でありましょう。帝国軍はあくまで帝

国のため、周辺地域の安定を実現するべく然るべき対応をしてるだけですよ」

オリビエ　「それは非常に結構なことだ。だが……それにしては情報局の人間が周辺地域に赴きすぎているのは気になるな。しかも、抱えていた問題が深刻化するよりも以前からだ」

オズボーン　「フフ、そのような情報を、どの筋から入手されたのかは、あえて問いますまい。全ては危機管理の思想によるもの。だからこそ我が軍は、これまで幾つもの有事を治めることが出来たのです」

オリビエ　「周辺地域の怨嗟とテロという危険と引き換えにね。正直、貴方がこうして単身リベールを訪れたというのが、いささか信じられない気分さ。今のエレボニアにおいて恐らく、一番テロの対象として狙われている人間だろうからね」

オズボーン　「フフ、恐れ入ります。ですが、どうかご心配なく。優秀なスタッフのおかげでテロへの対策は万全でしてね。おかげで、このあと安心してクロスベルに向かう事ができます」

オリビエ　「な……!?」

オズボーン　「クロスベルの政府代表と極秘の会談を行う予定でしてね。最近、共和国の資本が流れ込んで対抗勢力に押され気味なのだとか。一度、行ってみたい場所でしたので、これを機会に訪れてみようかと」

オリビエ　「ば、馬鹿な……今のクロスベルは各国の勢力が入り乱れた状況だ！　緩衝地帯であるのをいいことにテロ組織や犯罪組織などの温床になっているとも聞く……そんな場所に非公式とはいえ、帝国宰相が乗り込むだと……!?」

オズボーン　「それを言うなら殿下。あなたとて同じことでしょう。かの浮遊都市に乗り込み、視察という大任を果たされて地上に戻られた。フフ、それと較べれば、たかがクロスベル訪問ごとき、子供の遣いと同じこと」

オリビエ　「…………」

オズボーン　「今、本国で殿下は、ちょっとした英雄扱いですよ。その殿下が《白き翼》と名高い《アルセイユ》で帝都に凱旋する。《帝国時報社》を始めとする各方面への連絡もぬかりはない……。まさに殿下が見込まれた通り、華々しいご帰還となるでしょうな」

オリビエ　「っ……」

オズボーン　「フフ、どうかこの機会を最大限に活かして、ご自分の足場を固めるがよろしい。殿下、私はあなたに大いに期待しているのですよ」

オリビエ　「……期待している、か。はは、それは全く予想外の言葉だな。私はてっきり、貴方がわざわざ釘を刺しに来たと思ったのだが」

オズボーン　「まさか……どうしてそのような事を？　私と殿下はそもそも、同じ立場にあるというのに」

オリビエ　「なに……」

オズボーン　「殿下。あなたはエレボニアという旧い帝国を憎んでいるはずだ。数多の貴族によって支配され、愚にも付かない因習としがらみに、がんじがらめになった旧い体制を。そうではありませんか？」

オリビエ　「…………」

オズボーン　「『鉄血宰相』などと大仰に呼ばれているようですが……。帝国における私の立場は、まだまだ決定的ではありません。帝都での支持者は多いとはいえ、いまだ諸侯の影響が強い地方での支持までは集めきれていない。帝国軍への影響力は認めますが、それでも7割程度。残りは諸侯の支配下にあり、それに彼らの私設軍が加わったら立場は完全に逆転するでしょう。……私もいまだ帝国における主導権を巡って戦いの最中にあるのですよ」

オリビエ　「だからこそ鉄道網を全土に敷き、帝国全土に風穴を開け、領土を拡張することで新たなる発言権を得るか……」

オズボーン　「フフ、やはり貴方は私の一番の理解者のようだ。改めて──私に協力なさい、殿下。貴方が協力してくれれば、私の改革も勢いづくでしょう。腐敗した貴族勢力も互いに結託する暇もないまま崩壊へと導かれる……それは貴方が、もっとも望んでいる事のはずだ」

オリビエ　「……宰相。一つだけ聞かせてもらおう。《結社》とはどのような関係だ？」

オズボーン　「フフ、何を仰っているのか、いささか判りかねますが……ただ、改革のためならば利用できる要素は全て利用する……それが私の政治理念ですよ」

オリビエ　「……なるほど。確かに我々は気が合いそうだ。しかしだからこそ……その申し出は断らせてもらおう」

オズボーン　「ほう……？」

オリビエ「確かに私は、腐敗した貴族勢力をあまり好きにはなれない……いや、貴方の言う通り憎んでいると言ってもいいだろう。だが……それ以上に貴方のやり方が恐いのだよ」

オズボーン「…………」

オリビエ「貴方のやり方はおそらく、ある種の幻想を作り上げることで国家全体を熱狂に巻き込むことだ。その熱狂の中において確かに旧勢力は打倒されるだろう。だが……一度回り始めた歯車が、もはや止まることはありえない。全てを巻き込みながら、際限なく成長を続けていくだろう。……宰相。貴方はそれが判っているのか?」

オズボーン「フフ、もちろんですとも。――まさにそれこそが私の改革の第一段階なのですから」

オリビエ「っ……」

オズボーン「その先は殿下……貴方が私に協力する気になったらお教えするといたしましょう。まずは納得のゆくまで、ご自分の足場を固めるがよろしい。……もっともそのためには貴方が嫌っている貴族勢力すらも手懐ける必要があるでしょうがね」

オリビエ「フッ……何もかもお見通しという事か」

ここで正午の鐘が小さく鳴り始める。

オズボーン「正午の鐘……そろそろ船が到着しますか。それでは殿下。私めはこれで失礼いたします。二週間後……また帝都でお会いましょう」

オズボーン、踵を返して出口に向かい、扉を開ける。

オズボーン「では、失礼するよ」

ミュラー「は……」

オズボーンの立ち去る足音。代わりにミュラーが入ってくる。

ミュラー「話は終わったようだな。……どうした? 随分と疲れた顔をして」

オリビエ「いや、なに。改めて、自分が喧嘩を売った相手の怪物ぶりを思い知らされただけさ」

○《アルセイユ》甲板

オリビエ「わざわざアルセイユまで見送りに来てくれるとは。すまなかったね、シェラ君」

シェラザード「ふふ、ちょうど仕事で王都に用事があったついでよ。……その様子じゃ当分、会えなくなりそうな雰囲気だしね」

オリビエ「フッ、ボクの望みはあくまでシェラ君みたいな美女と一緒に気ままな日々を送る事なんだがねぇ」

シェラザード「はいはい。ま、早くそんな身分になれるよう、せいぜい頑張りなさいな。そういえば、あの宰相の側にいた若いのは何者なの? 妙に隙のない足運びだったけど……」

オリビエ「レクター・アランドール。帝国政府から出向していた書記官さ。どうやら今回の宰相の訪問は全て彼が段取りを行ったようだね。何者かは知らないが……相当、優秀な参謀役なのだろう」

クローゼ「……オリヴァルト殿下。実はわたくし……あの方のことを知っているのです」

シェラザード「あら……」

オリビエ「それは……本当かい?」

クローゼ「はい……。殿下がオズボーン宰相とお話しをしている最中、お話をしていました」

○グランセル城・空中庭園（回想）

ジークのピュイ! という鳴き声。

レクター「よ、久しぶり。変わってないね、お前」

ジークのピュピュイ! という鳴き声。

レクター「ま、主人共々元気そうで何よりだぜ」

クローゼ「……先輩」

コツコツと歩いてくるクローゼの足音。

レクター「これはクローディア殿下。ご機嫌うるわしゅう」

クローゼ「どういう事なんですか? どうして先輩が……」

レクター「はて……何のことやら自分にはさっぱり。どなたかと勘違いされていらっしゃるのでは?」

クローゼ「レクター・アランドール……2年前までジェニス王立学園に在籍していた、前生徒会長……先輩、あなたの事ですよね」

レクター「いえ、実は私の名前は、レク・タ～ランドー

ルと申しまして」

クローゼ「ふざけないで下さい、先輩っ！　あんな風に、突然退学届けを出して、何も言わずに居なくなるなんて……！　あの冷静なレオ先輩が、怒鳴り声を上げていました！　ルーシー先輩は『レクターらしい』って苦笑しながらも泣きそうな顔で！　ジルやハンス君、それにもちろん私だって……！」

レクター「くくっ……わははははっ！」

クローゼ「レクター先輩……！」

レクター「悪い悪い。そう恐い顔するなって。しかし、お前さん。相変わらずアタマが固いねぇ。王太女になってもクソ真面目なところは全然変わってないみたいだなァ」

○《アルセイユ》甲板

オリビエ「《鉄血宰相》に連なる者が、ボクよりも前にリベールを訪れていた。つまりそれは、宰相独自の情報網が既にリベールに構築されていた可能性を示唆している……」

カシウス「ふむ……その可能性は高そうですな。情報部のクーデターから今回の《輝く環》の異変まで……。その一部始終を把握されていてもおかしくはないでしょう」

オリビエ「………………」

シェラザード「本当、とんでもないわね……」

クローゼ「先ほど、先輩から殿下への伝言を承りました」

レクター「『踊り疲れたところを、怪物に呑み込まれないよう気を付けな』」

クローゼ「……だそうです」

ミュラー「っ……」

オリビエ「やれやれ……痛いところを突いてくるね。フフ、何だか別の快感に目覚めてしまいそうだよ。だが……やられっぱなしは正直、あまり趣味じゃないかな」

クローゼ「え……」

オリビエ「クローディア姫。ひとつ、お願いがあるんだが……」

○カラブリア号の甲板

オズボーン「オリヴァルト皇子……フフ、悪くない仕上がりだ。どのように動いてくれても、それはそれで使いようがある」

レクター「アンタにとって全ての要素は《駒》だからな。あの皇子も、このオレもそして《身喰らう蛇》とやらも」

オズボーン「そう、そして私自身もだ。帝国という巨大な盤上を舞台にした魂が震えるような激動の遊戯……。お前も、それを見たいがために私に付いてきているのだろう？」

レクター「ま、否定はしないけどな。……でもこの駒は、いつ裏切るか判らないぜ？」

オズボーン「それならそれで構わんよ。私がその可能性を考えていないとでも思ったか？」

レクター「フン、言ってみただけさ。ところで……他の『子供たち』はどうよ？」

オズボーン「フフ、どの子も順調のようだ。この分では、皇子の頑張りも無駄に終わる可能性もあるだろう。やれやれ……少し手を抜いてあげるとしようか」

レクター「ケッ……悪趣味なオヤジだ」

レクター、窓の外を見つめる。

レクター「……なぁ宰相閣下。あんまり侮らない方がいいかもしれないぜ……？」

オズボーン「なに……」

次の瞬間、アルセイユのエンジン音が響き渡る。

乗客A「な、なんだ！？」

乗客B「あれ、アルセイユだ！」

乗客C「なんでこの船と併走してるんだ！？」

オズボーン「ど、どういうことだ？」

○《アルセイユ》甲板

ごうごうと風切りの音。

ミュラー「これ以上は近づけないぞ！」

オリヴァルト皇子「十分だ！　……オズボーン宰相閣下、僕からの心づくしの花束、どうか受け取って欲しい」

オリビエがおもむろにバラの花束を懐から取り出し、花束を定期船へと放り投げる。

オリヴァルト皇子「ラブ・イズ・フォーエバー！」

そのまま拳銃を抜いて、空中の花束を撃ち抜き、弾け飛んだバラの花びらが定期船の甲板に舞い散る。

○カラブリア号の甲板

オズボーンたちの頭上に花びらが舞っている状況。

オズボーン「これは……」

レクター「バラの花……みたいだな」

ここで定期船の船内放送の合図が鳴り響く。

女性の声「皆様、左舷に現れましたのは、ご存じリベール王家の高速巡洋艦、《アルセイユ》でございます。そして、アルセイユにご乗船の、エレボニア帝国のオリヴァルト皇子殿下より、メッセージを賜っております。『今日、この日に出会えた幸運を空の女神に感謝する。あなた方の旅に美しきバラと女神の祝福を。そしてくれぐれも気を付けて故郷にお戻りになって欲しい』以上です」

そのままエンジン音を響かせて飛び去っていくアルセイユ。

レクター「アホだ……オレよりもアホがいる……」

オズボーン「ククク……ハハハハハハハッ！！　いいだろう、放蕩皇子！　この《鉄血宰相》にどこまで喰い下がれるか……せいぜいお手並みを拝見させてもらうとしようぞ！」

○オリビエの自室

オリビエ「いやぁ、あれは最高に愉快だったねぇ。協力してくれたユリア大尉には、いくら感謝してもしたりないぐらいだよ」

ミュラー「まったく……」

オリビエ「しかし、宰相殿の顔が遠すぎて見られなかったのがとてもとても残念だ。きっと、世にもマヌケな顔をしていただろうからね」

ミュラー「その点には、同意してやる」

オリビエ「フフッ」

ミュラー「フッ……」

オリビエ「というあたりで、僕の詩は終わりだ。ご静聴、感謝いたします」

ミュラー「なにが感謝だ。無理矢理聞かせたくせに」

オリビエ「まぁそう言わないでくれたまえ。なかなか面白かっただろう？」

ミュラー「…………」

オリビエ「ん？　どうしたのかな、僕の顔をそんなにじっと見つめて。イヤン、照れるじゃないか」

ミュラー「どうしてだ？」

オリビエ「何がだい？」

ミュラー「なぜこんな詩を書いた？　それに今までお前は、自作の詩を何かに書き留めたことはなかったはずだが」

オリビエ「そうだったかな？」

ミュラー「…………」

オリビエ「やだなぁ、ミュラー君。そんな怖い顔をしないでくれたまえよ」

ミュラー「…………」

オリビエ「(観念した感じのため息)。……記録、だよ」

ミュラー「記録？」

オリビエ「これさえ読めば、《異変》に関連して、なにが起きたか、オズボーンが何を企んでいるかがわかる。……万が一、僕が志半ばで倒れたとしても、誰かが知ることになる」

ミュラー「オリビエ……」

オリビエ「…………」

ミュラー「くだらん」

オリビエ「え？」

ミュラー「そんなくだらん詩を好きこのんで歌う奴は、この世にひとりもいない」

オリビエ「そ、そんなぁ！」

ミュラー「だから、お前が自分で歌え。年を食ってから、昔は良かったと懐かしみ、子や孫に疎まれながら歌え」

オリビエ「ミュラー……」

ミュラー「いいな」

オリビエ「……そうだな、そうしよう。では老後の楽しみのために、もうひと頑張りするとしようか」

ミュラー「おう」

オリビエ「では……いざ紡がん、新たなる我らの戦いの詩を！」

FALCOM MAGAZINE SPECIAL プレゼント!!

アンケートにお答えいただいた方から抽選で
ここでしか手に入らないアイテムをプレゼント！

今月のプレゼントはこちら!!



① 各１名様

❶『英雄伝説 閃の軌跡』発売記念
豪華キャストサイン色紙

ついに発売となった『英雄伝説 閃の軌跡』キャスト陣のプレゼント企画第３弾！　今月はオリヴァルトやオズボーンなど、Ⅶ組を取り巻く世界で活躍するキャラクター達をチョイス。

【キャスト】	アルフィン（CV：佐藤聡美）
トワ（CV：野中藍）	ミスティ（CV：田村ゆかり）
エリゼ（CV：後藤沙緒里）	オリヴァルト（CV:子安武人）
シャロン（CV：ゆかな）	オズボーン（CV：中田譲治）



② ２名様

❷みんな集まれ！
ファルコム学園②
新久保先生サイン入り
単行本

９月26日に発売された大人気コミック『ファルコム学園』。新久保先生のサインを入れたスペシャルな単行本はここだけしか手に入らない！

プレゼントの応募方法

こちらのアンケートの回答を下記のアドレスまでメールにてお送りください。
プレゼントの当選者には編集部よりメールにてお知らせ致します。

宛先：
件名：vol.32プレゼント係

１：お名前（ペンネーム可）
２：面白い→
　　つまらない→
３：①
　　②
４：希望するプレゼント番号
５：ご意見・ご感想など

【記事一覧】

1：英雄伝説 閃の軌跡 潜入レポート
　日本ファルコム株式会社 代表取締役
　近藤季洋氏インタビュー
2：『みんな集まれ！ファルコム学園』
3：『地元に帰ろう』
4：jdkバンドドラマー・オカジの
　人生半キャラずらし
5：ティオのファルコムラジオ
　めんどくさいです…
　でもがんばりますの舞台裏
6：jdkバンドボーカル・コテカナのコテ放題♥
7：ファルコムニュース
8：ドラマＣＤシナリオ
　『英雄伝説 空の軌跡 オリビエ物語
　～未完成の叙事詩～』

アンケート

①ファルコムのゲーム音楽の
　楽譜集が発売されたら
　購入を検討しますか？
②日本ファルコムの
　ゲーム作品で１番好きな作品は
　何ですか？

●アンケートの２番は記事一覧から１つずつ今月号の面白かった・つまらなかった記事を選んでご記入ください。３番は「はい・いいえ」「作品名」でお答えください。

宛先はこちら➡ falmaga@field-y.co.jp　応募締め切り 10月25日

メールにてお送りいただくお名前やご住所等の情報は、賞品の発送のためのみに利用し、その他の目的には利用致しません。
また、情報は応募締め切り後３ヶ月を越えて保有することはありません。



月刊 FALCOM MAGAZINE Vol.32

発行人	田中一寿
発行協力	日本ファルコム株式会社
編集	小渕智幸 大場恵美子
ライティング	宮崎洋平
デザイン・DTP	さとうだいち
表紙ロゴデザイン	荻窪裕司（ビーニーズ）
発行	株式会社フィールドワイ 〒 101-0062 東京都千代田区神田駿河台3-1-9　日光ビル3F TEL 03-5282-2211（代表） http://www.field-y.co.jp/
制作・販売協力	シナノ印刷株式会社